

素戔鳴尊

芥川龍之介

青空文庫

たかまがはら
高天原の国も春になつた。

今は四方よもの山々を見渡しても、雪の残っている峰は一つもなかつた。牛馬の遊んでいる草原くさはらは一面に仄ほのかな緑をなすつて、その裾すそを流れて行く天あめの安河やすかわの水の光も、いつか何となく人ひとなつた。懐かしい暖みを湛たたえているようであつた。ましてその河下かわしもにある部落には、もう燕つばくらも帰つて来れば、女たちが瓶かめを頭に載せて、水を汲みに行く噴ふき井いの椿つばきも、とうに点々と白い花を濡れ石の上かに落おつていた。――

そう云う長閑のどかな春の日の午後、天あめの安河やすかわの河原には大勢の若者が集まって、余念もなく力ちからくら競べに耽ふけっていた。

始はじめ、彼等は手て手でに弓矢を執とつて、頭上の大空へ矢を飛ばせた。

彼等の弓の林の中からは、勇ましい弦ゆんづるの鳴る音が風のように起つたり止んだりした。そうしてその音の起る度に、矢は無数の蝗いなごのごとく、日の光に羽根を光らせながら、折かから空かに懸かつている霞の中へ飛んで行つた。が、その中でも白い隼はやぶさの羽根の矢ばかりは、必ずほかの矢よりも高く——ほとんど影も見えなくなるほど高く揚つた。それは黒と白と市松いちまつもよう模様の倭衣しずりを着た、容貌ようぼうの醜みにくい一人の若者が、太い白檀木しらまゆみの弓を握つて、時々切つて放す利とが矢であつた。

その白羽しろはの矢が舞い上る度に、ほかの若者たちは空を仰いで、口々に彼の技倆ぎりようを褒めほめそやした。が、その矢がいつも彼等のより高く揚る事を知ると、彼等は次第に彼の征矢そやに冷淡な態度を装よそおい出した。のみならず彼等の中の何者うちかが、彼には到底及ばなくとも、かなり高い所まで矢を飛ばすと、反かえつてその方へ賛辞を与えたりした。

容貌の醜い若者は、それでも快活に矢を飛ばせ続けた。するとほかの若者たちは、誰からともなく弓を引かなくなつた。だから今まで紛々ふんぶんと乱れ飛んでいた矢の雨も、見る見る数が少なくなつて来た。そうしてとうとうしまいには、彼の射る白羽の矢ばかりが、まるで昼見える流りゆうせい星せいのように、たった一筋空へ上るよう

になつた。

その内に彼も弓を止めて、得意らしい色を浮べながら、仲間
若者たちの方を振返つた。が、彼の近所にはその満足を共にすべ
く、一人の若者も見当らなかつた。彼等はもうその時には、みん
な河原の水際みぎわにより集まつて、美しい天の安河の流れを飛び越え
るのに熱中していた。

彼等は互に競きそい合つて、同じ河の流れにしても、幅の広い所を
飛び越えようとした。時によると不運な若者は、焼やき太刀ただちのように
日を照り返した河の中へ転ころげ落ちて、眩まぼゆい水みず煙けむりを揚げる事
もあつた。が、大抵たいていは向うの汀なぎさへ、ちようど谷を渡る鹿のよう
に、ひらりひらりと飛び移つて行つた。そうして今まで立ってい

たこちらの汀を振返つては声々に笑つたり話したりしていた。

容貌の醜い若者はこの新しい遊戯を見ると、すぐに弓矢を砂の上に捨てて、身軽く河の流れを躍り越えた。そこは彼等が飛んだ中でも、最も幅の広い所であつた。けれどもほかの若者たちはさらに彼には頓着しなかつた。彼等には彼の後で飛んだ——彼よりも幅の狭い所を彼よりも楽に飛び越えた、背のせい高い美貌びぼうの若者の方が、遥はるかに人気があるらしかつた。その若者は彼と同じ市松のし倭ずり衣ぎを着ていたが、頸くびに懸けたまがたま勾玉まがたまや腕はに嵌はめたくしろ釧くしろなどは、誰よりも精巧な物であつた。彼は腕を組んだまま、ちよいと羨しそうな眼を挙げて、その若者を眺めたが、やがて彼等の群を離れて、たつた一人陽かげろう炎かの中かを河かわ下しもの方へ歩き出した。

二

河下の方へ歩き出した彼は、やがて誰一人飛んだ事のない、三丈ほども幅のある流れの汀なぎさへへ足を止めた。そこは一旦たぎ滞った水が今までの勢いを失いながら、兩岸の石と砂との間に青々とよど澱んでいる所であつた。彼はしばらくその水面を目測しているらしかつたが、急に二三歩汀を去ると、まるで石投げを離れた石のように、勢いよくそこを飛び越えようとした。が、今度はとうとう飛び損じて、すさま凄じい水煙を立てながら、まっさかさまに深みへ落ちこんでしまった。

彼の河へ落ちた所は、ほかの若者たちがいる所と大して離れて
いなかった。だから彼の失敗はすぐに彼等の目にもはいった。彼
等のある者はこれを見ると、「ざまを見ると」と云うように腹を抱
えて笑い出した。と同時にまたある者は、やはり囃し立てながら
も、以前よりは遙はるかに同情のある声援の言葉を与えたりした。そう
云う好意のある連中の中には、あの精巧な勾玉や釧の美しさを誇
っている若者なども交まじっていた。彼等は彼の失敗のために、世間
一般の弱者のごとく、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出来た
のであった。が、彼等も一瞬の後には、また以前の沈黙に——敵
意を蔵した沈黙に還かえらなければならぬ事が出来た。

と云うのは河に落ちた彼が、濡ぬれ鼠ねずみのようになったまま、向う

の汀へ這い上ったと思うと、執念しゅうねんぶか深くもう一度その幅の広い流れの上を飛び越えようとしたからであつた。いや、飛び越えようとしたばかりではない。彼は足を縮ちぢめながら、明礬みょうばんいろ色の水の上へ踊り上つたと思う内に、難なくそこを飛び越えた。そうしてこちらの水際みぎわへ、雲のような砂煙を舞い上げながら、どきりと大きな尻餅しりもちをついた。それは彼等の笑を買うべく、余りに壮嚴すぎる滑稽であつた。勿論彼等の間からは、喝采も歡呼も起らなかった。

彼は手足の砂を払うと、やつとずぶ濡れになつた体を起して、仲間の若者たちの方を眺めやつた。が、彼等はもうその時には、流れを飛び越えるのにも飽きたと見えて、また何か新しい力ちからく

競べを試むべく、面白そうに笑い興じながら、河上かわかみの方へ急ぐ所であつた。それでもまだ容貌の醜い若者は、快活な心もちを失わなかつた。と云うよりも失う筈がなかつた。何故なぜと云えば彼等の不快は未いまだに彼には通じなかつた。彼はこう云う点になると、実際どこまでも御目出度おめでたく出来上つた人間の一人であつた。しかしまたその御目出度さがあらゆる強者に特有な烙やきいん印である事も事實であつた。だから仲間の若者たちが河上の方へ行くのを見ると、彼はまだ滴しずくを垂らしたまま、麗うららかな春の日に目まかげをして、のそのそ砂の上を歩き出した。

その間にほかの若者たちは、河原かわらに散在する巖石がんせきを持上げ合あう遊戯ゆうぎを始めていた。岩は牛ほどの大きさのも、羊ほどの小ささ

のも、いろいろ陽炎かげろうの中に転がっていた。彼等はみんな腕まくりをして、なるべく大きい岩を抱だき起そうとした。が、手ごろな巖石のほかは、中でも膂りよりよく力の逞たくましい五六人の若者たちでない
と、容易に砂から離れなかつた。そこでこの力競べは、自然と彼等五六人の独占する遊戯あそびに変わってしまった。彼等はいずれも大きな岩を軽々と擡もたげたり投げたりした。殊に赤と白と三角模様の倭し衣すりの袖そでをまくり上げた、顔かお中鬚じゆうひげに埋うずまっている、背せいの低い猪い首くびの若者は、誰も持ち上げない巖石を自由に動かして見せた。周しゅう圍たいすに佇たんだ若者たちは、彼の非凡ちからわざな力業ちからわざに賞讃しょうさんの声を惜まなかつた。彼もまたその賞讃しょうさんの声に報ゆべく、次第に大きな巖石に力を試みようとするらしかつた。

あの容貌の醜い若者は、ちようどこの五六人の力競ちからくらべの真最中へ
来合せたのであつた。

三

あの容貌の醜い若者は、両腕を胸に組んだまま、しばらくは力
自慢の五六人が勝負を争うのを眺めていた。が、やがて技癢ぎように堪
え兼ねたのか、自分も水だらけな袖をまくると、幅の広い肩そびやを聳
かせて、まるで洞穴ほらあなを出る熊のように、のそのそとその連中の
中へはいつて行つた。そうしてまだ誰も持ち上げない巖石の一つ
を抱くが早いのか、何の苦もなくその岩を肩の上までさし上げて見

せた。

しかし大勢の若者たちは、依然として彼には冷淡であつた。ただ、その中でもさつきから賞讃の声を浴びていた、背の低い猪首の若者だけは、容易ならない競争者が現れた事を知つたと見えて、さすがに妬ねたましそうな流し眼をじろじろ彼の方へ注いでいた。その内に彼は担かついだ岩を肩の上で一ひと揺ゆり揺ゆつてから、人のいない向うの砂の上へ勢いよくどうと投げ落した。するとあの猪首の若者はちようど餌に饑うえた虎のように、猛然と身を躍らせながら、その巖石へ飛びかかつたと思うと、咄とつ嗟さの間に抱え上げて、彼にも劣らず楽々と肩よりも高くかざして見せた。

それはこの二人の腕力が、ほかの力自慢の連中よりも数段上に

あると云う事を雄弁に語っている証拠であつた。そこで今まで臆おそくめん
面も無く力競べをしていた若者たちはいずれも興きようのさめた顔を
見合せながら、周圍たたずに佇たんでいる見物仲間へ嫌いやでも加わらずには
いられなかつた。その代りまた後あとに残つた二人は、本来さほど敵
意のある間柄でもなかつたが、騎虎きこの勢いで已やむを得ず、どちら
か一方が降参するまで雌雄しゆうを争わずにはいられなくなつた。この
形勢を見た多勢の若者たちは、あの猪首いぐびの若者がさし上げた岩を
投げると同時に、これまでよりは一層熱心にどつとどよみを作り
ながら、今度はずぶ濡れになつた彼の方へいつになく一斉まなこに眼を
注いだ。が、彼等がただ勝負にのみ興味を持っていると云う事は、
——彼自身に対してはやはり好意を持っていないと云う事は、彼

等の意地悪いじわるるそう眼の中にも、明かによめる事実であつた。

それでも彼は相あい不かわ変らず悠々と手に唾つばなど吐ききながら、さつきの

よりさらに一ひと嵩かさ大きい巖石の側へ歩み寄つた。それから両手に

岩いわを抑おさえて、しばらく呼吸を計つていたが、たちまちうんと力を

入れると、一気に腹まで抱え上げた。最後にその手をさし換えて

から、見る見る内にまた肩まで物も見事に担かついで見せた。が、今

度は投げ出さずに、眼で猪首の若者を招くと、人の好きそうな微

笑を浮べながら、

「さあ、受取るのだ。」と声をかけた。

猪首の若者は数歩を隔てて、時々髭ひげを嚙かみながら、嘲あざるように

彼を眺めていたが、

「よし。」と一言ひとこと答えると、つかつかと彼の側へ進み寄つて、すぐにその巖石を小山のような肩へ抱だき取つた。そうして二三歩歩いてから、一度眼の上までさし上げて置いて、力の限り向うへ抛ほうり投なげた。岩は凄じい地響きをさせながら、見物の若者たちの近くへ落ちて、銀粉のような砂煙を揚げた。

大勢の若者たちはまた以前のようにどよめき立つた。が、その声はまだ消えない内に、もうあの猪首の若者は、さらに勝敗を争みぎわうべく、前にも増して大きい岩を水際の砂から抱みぎわき起たしていた。

四

二人はこう云う力ちからくら競べを何回となく闘たたかわせた。その内に追
い追い二人とも、疲労の気色けしきを現して来た。彼等の顔や手足には、
玉のような汗あせが滴したたっていた。のみならず彼等の着ている倭衣しずりは、
模様の赤黒も見えないほど、一面に砂にまみれていた。それでも
彼等は息を切らせながら、必死に巖石いわたを擡もたげ合つて、最後の勝敗
が決するまでは容易やに止めやめそうな容子ようすもなかつた。

彼等を取り巻いた若者たちの興味は、二人の疲労が加わるのに
つれて、益々強くなるらしかった。この点ではこの若者たちも闘と
うけいうけい鶏うけいや闘とうけん犬けんぶつの見物けんぶつ同様、残忍でもあれば冷酷でもあつた。彼
等は今もう猪首の若者に特別な好意を持たなかつた。それにはす
でに勝負の興味が、余りに強く彼等の心を興奮の網とらに捉とらえていた。

だから彼等は二人の力者りきしやに、代る代る声援を与えた。古来そのために無数の鶏、無数の犬、無数の人間が徒らいたずらに尊い血を流した、——宿命的にあらゆる物を狂気にさせる声援を与えた。

勿論この声援は二人の若者にも作用した。彼等は互に血走った眼の中に、恐るべき憎悪を感じ合った。殊に背せいの低い猪首いぐびの若者は、露骨にその憎悪を示して憚はばからなかつた。彼の投げ捨てる巖石は、しばしば偶然とは解釈し難いほど、あの容貌の醜い若者の足もとに近く転げ落ちた。が、彼はそう云う危険に全然無頓着でいるらしかった。あるいは無頓着に見えるくらい、刻々近づいて来る勝敗に心を奪われているのかも知れなかつた。

彼は今も相手の投げた巖石を危くかわ躲しながら、とうとうしまい

には勇を鼓して、これも水際に横わっている牛ほどの岩を引起しにかかった。岩は斜に流れを裂いて、淙々とたぎる春の水に千年の苔を洗わせていた。この大岩を擡げる事は、高天原第一の強力と云われた手力雄命でさえ、たやすく出来ようとは思われなかつた。が、彼はそれを両手に抱くと、片膝砂へついたまま、渾身の力を揮い起して、ともかくも岩の根を埋めた砂の中からは抱え上げた。

この人間以上の臂力は、周囲に佇んだ若者たちから、ほとんど声援を与うべき余裕さえ奪った観があつた。彼等は皆息を呑んで千曳の大岩を抱えながら、砂に片膝ついた彼の姿を眼も離さずに眺めていた。彼はしばらくの間動かなかつた。しかし彼が懸

命の力を尽している事だけは、その手足から滴り落ちる汗の絶えないのにも明かであつた。それがやや久しく続いた後、声をひそめていた若者たちは、誰からともなくまたどよみを挙げた。ただそのどよみは前のような、勢いの好い声援の叫びではなく、思わず彼等の口を洩れた驚歎の呻きにほかならなかつた。何故と云えばこの時彼は、大岩の下に肩を入れて、今までついていた片膝を少しずつ擡げ出したからであつた。岩は彼が身を起すと共に、一寸ずつ、一分ずつ、じりじり砂を離れて行つた。そうして再び彼等の間から一種のどよみが起つた時には、彼はすでに突兀たる巖石を肩に支えながら、みずらの髪を額に乱して、あたかも大地を裂いて出た土雷の神のごとく、河原に横わる乱石の中に雄

々しくも立ち上っていた。

五

千曳ちびぎの大岩を担かついだ彼は、二足三足蹠ふたあし みあし ぞうろう跟ぞうろうと流れの汀なぎさから歩みを運ぶと、必死と食いしばった齒の間から、ほとんど呻吟する様な声で、「好いいか渡いすぞ。」と相手を呼んだ。

猪首いくびの若者は、逡巡しゆんじゆんした。少くとも一瞬間は、凄壮そのものような彼の姿に一種の威圧を感じたらしかつた。が、これもすぐにもまた絶望的な勇気を振り起して、

「よし。」と嘯かみつくように答えたと思うと、奮然と大手を拈げ

ながら、やにわにあの大岩を抱き取ろうとした。

岩はほどなく彼の肩から、猪首の若者の肩へ移り出した。それはあたかも雲の堰が押し移るがごとく緩漫であつた。と同時にまた雲の峰が堰き止め難いごとく刻薄であつた。猪首の若者はまつ赤になつて、狼のように牙を噛みながら、次第にのしかかつて来る千曳の岩を逞しい肩に支えようとした。しかし岩が相手の肩から全く彼の肩へ移つた時、彼の体は刹那の間、大風の中の旗竿のごとく揺れ動いたように思われた。するとたちまち彼の顔も半面を埋めた鬚を除いて、見る見る色を失い出した。そうしてその青ざめた額から、足もとの眩い砂の上へ頻に汗の玉が落ち始めた。——と思う間もなく今度は肩の岩が、ちようどさつきとは反

対に一寸ずつ、一分いちぶずつ、じりじり彼を圧して行つた。彼はそれでも死力を尽して、両手に岩を支えながら、最後まで悪闘を続けようとしたが、岩は依然として運命のごとく下つて来た。彼の体は曲り出した。彼の頭も垂れるようになった。今の彼はどこから見ても、石塊いしくれの下にもがいている蟹かにとさらに変りはなかつた。

周囲に集まつた若者たちは、余りの事に氣を奪われて、茫然とこの悲劇を見守つていた。また實際彼等の手では、到底千曳の大岩の下から彼を救い出す事はむずかしかつた。いや、あの容貌の醜い若者でさえ、今となつては相手の背せなからさつき擡もたげた大盤だいばん石じやくを取りのける事が出来るかどうか、疑わしいのは勿論であつた。だから彼もしばらくの間は、恐怖と驚愕きようがくとを代る代る醜

い顔に表しながら、ただ、漫然と自失した眼を相手に注ぐよりほかはなかつた。

その内に猪首の若者は、とうとう大岩に背を圧されて、崩折れるように砂へ膝をついた。その拍子に彼の口からは、叫ぶとも呻くとも形容出来ない、苦しそうな声が一聲溢れて来た。あの容貌の醜い若者は、その声が耳にはいるが早いか、急に悪夢から覚めたごとく、猛然と身を翻して、相手の上に蔽いかぶさつた大岩を向うへ押しつけようとした。が、彼がまだ手さえかけない内に、猪首の若者は多愛もなく砂の上にのめりながら、岩にひしがれる骨の音と共に、眼からも口からも夥しく鮮な血を迸らせた。それがこの憐むべき強力ごうりきの若者の最期であつた。

あの容貌の醜い若者は、ぼんやり手を束ねたまま、陽炎の中に倒れている相手の屍骸を見下した。それから苦しそうな視線を挙げて、無言の答を求めるように、おずおず周囲に立っている若者たちを見廻した。が、大勢の若者たちは麗らかな日の光を浴びて、いずれも黙念と眼を伏せながら、一人も彼の醜い顔を仰ぎ見ようとするものはなかつた。

六

高天原の国の若者たちは、それ以来この容貌の醜い若者に冷淡を装う事が出来なくなつた。彼等のある一団は彼の非凡な腕力

に露骨な嫉妬しつとを示し出した。他の一団はまた犬のごとく盲目的に彼を崇拜した。さらにまた他の一団は彼の野性と御目出度おめでたさとに残酷な嘲ちやうしやう笑を浴せかけた。最後に数人の若者たちは心から彼に信服した。が、敵味方の差別なく彼等がいずれも彼に対して、一種の威圧を感じ始めた事は、打ち消しようのない事実であつた。こう云う彼等の感情の変化は、勿論彼自身も見逃さなかつた。が、彼のために悲惨な死を招いた、あの猪首いくびの若者の記憶は、未だに彼の心の底に傷いたましい痕跡こんせきを残していた。この記憶を抱いだいている彼は、彼等の好意と反感との前に、いずれも当惑に似た感じを味わないではいられなかつた。殊に彼を尊敬する一団の若者たちに接する時は、ほとんど童女にでも似つかわしい羞恥しゆうちの情

さえ感じ勝ちであつた。これが彼の味方には、今までよりまた一層、彼に好意の目まなざしを向けさせることになるらしかつた。と同時に彼の敵には、それだけ彼に反感を加えさせる事にもなるらしかつた。

彼はなるべく人を避けた。そうして多くはたった一人、その部落を繞る山間めぐの自然うちの中に時を過うごした。自然は彼に優しかつた。森は木の芽を煙らせながら、孤独に苦しんでいる彼の耳へも、人懐やまぼとしい山鳩やまぼとの声を送せつて来る事を忘れなかつた。沢も芽ぐんだ蘆あしと共に、彼の寂せきり寥ようを慰むべく、仄ほのかに暖い春の雲を物静な水に映あしていた。藪木やぶきの交まじる針金雀花はりえにしだ、熊笹の中から飛び立つ雉き子ぎす、それから深い谷川の水光りを乱あす鮎あゆの群、——彼はほとんど

至る所に、仲間の若者たちの間には感じられない、安息と平和とを見出した。そこには愛憎あいぞうの差別はなかった、すべて平等に日の光と微風との幸福に浴していた。しかし——しかし彼は人間であつた。

時々彼が谷川の石の上に、水を掠かすめて去来する岩いわ 燕つばめを眺めていると、あるいは山峡やまかいの辛夷こぶしの下に、蜜みつに酔よつて飛びも出来ない虻あぶの羽音はおとを聞いていると、何とも云いようのない寂しさが突然彼を襲う事があつた。彼はその寂しさが、どこから来るのかわからなかつた。ただ、それが何年か前に、母を失つた時の悲しみと似ているような気もちだけがした。彼はその当座とうざどこへ行つても、当然そこにいるべき母のいない事を見せられると、必ず落ら

くぼく
莫たる空虚の感じに压倒されるのが常であつた。その悲しみに
比べると、今の彼の寂しさが、より強いものとは思われなかつた。
が、一人の母を恋い^{なげ}歎くより、より大きいと云う心もちがあつた。
だから彼は山間の春の中に、鳥や獣の^{けもの}ごとくさまよいながら、幸
福と共に不可解な不幸をも味わずにはいられなかつた。

彼はこの寂しさに悩まされると、しばしば山腹に枝を張つた、
高い^{かしわこずえ}柏の梢に上つて、遙か目の下の谷間の景色にぼんやりと眺め
入る事があつた。谷間にはいつも彼の部落が、天の^{あめ}安河の^{やすかわ}河原^{かわら}
に近く、^{ごいし}碁石のように点々と茅葺^{かやぶ}き屋根を並べていた。どうかす
るとまたその屋根の上には、火^か食^{しよく}の煙が幾すじもかすかに立ち
昇つてゐる様も見えた。彼は太い柏の枝へ馬^{また}乗り^りに跨^{また}がりながら、

長い間その部落の空を渡つて来る風に吹かれていた。風は柏の小枝を揺ゆつて、折々枝頭の若芽の勻においを日の光の中に煽り立てた。が、彼にはその風が、彼の耳元を流れる度に、こう云う言葉を細々と囁ささいて行くように思われた。

「素す浅さ鳴のよ。お前は何を探しているのだ。お前の探しているものは、この山の上にもなければ、あの部落の中にもないではないか。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。お前は何をためらっているのだ。素す浅さ鳴のよ。……」

七

しかし素戔鳴すさのは風と一しよに、さまよつて歩こうとは思わなかつた。では何が孤独な彼を高天原たかまがはらの国に繋つないでいたか。——彼は自らみずかそう尋たずねると、必ず恥かしさに顔が赤くなつた。それはこの容貌の醜い若者にも、私ひそかに彼が愛している部落の娘がいたからであつた。そうしてその娘に彼のような野人が恋をすると云う事は、彼自身にも何となく不ふ似合にあいの感じがしたからであつた。

彼が始めてこの娘に遇あつたのは、やはりあの山腹の柏かしわの梢こずえに、たつた一人上つていた時であつた。彼はその日も茫然と、目の下に白くうねっている天あめの安河やすかわを眺めてみると、意外にも柏の枝の下から晴れ晴れした女の笑い声が起つた。その声はまるで氷の上へばらばらと礫こいしを投なげたように、彼の寂しい真昼の夢を突と嗟つきの

間に打ち砕いてしまった。彼は眠を破られた人の腹立たしきを感じながら、柏の下に草を敷いた林間の空き地へ眼を落した。するとそこには三人の女が、麗らかな日の光を浴びて、木の上の彼には気がつかないのか、頻しきりに何か笑い興じていた。

彼等は皆竹籠ひじを臂ひじにかけている所を見ると、花か木の芽か山やま独活うじどを摘みに来た娘らしかつた。素戔嗚はその女たちを一人も見知って居なかつた。が、彼等があいの部落いの中でも、卑いやしいものの娘でない事は、彼等の肩かかに懸かつている、美しい領巾ひれを見ても明かであつた。彼等はその領巾を微風ひるがえに翻ひるがえしながら、若草の上に飛び悩んで一羽の山鳩やまばとを追いまわしていた。鳩は女たちの手の間を縫ぬいつて、時々一生懸命に痛めた羽根をばたつかせたが、どうし

ても地上三尺とは飛び上る事が出来ないようであつた。

素戔鳴は高い柏の上から、しばらくこの騒ぎを見下していた。

するとその内に女たちの一人は臂に懸けた竹籠もそこへ捨てて、危く鳩を捕えようとした。鳩はまた一しきり飛び立ちながら、柔かい羽根を雪のように紛々とあたりへ撒き散らした。彼はそれを見るが早いか、今まで跨つていた太枝を掴んで、だらりと宙に吊り下つた。と思うと一つ弾みをつけて、柏の根元の草の上へ、勢いよくどさりと飛び下りた。が、その拍子に足を迂らせて、呆気にとられた女たちの中へ、仰向けさまに転がつてしまった。

女たちは一瞬間、唾のように顔を見合せていたが、やがて誰から笑うともなく、愉快そうに皆笑い出した。すぐに草の上から飛

び起きた彼は、さすがに間の悪そうな顔をしながら、それでもわざと傲然ごうぜんと、女たちの顔を睨にらめまわした。鳩はその間に羽根を引き引き、木の芽に煙っている林の奥へ、ばたばた逃げて行ってしまった。

「あなたは一体どこにいらしたの？」

やっと笑い止んだ女たちの一人は蔑さげすむようにこう云いながら、じろじろ彼の姿を眺めた。が、その声には、まだ抑え切れない可笑かしさが残っているようであった。

「あすこにいた。あの柏の枝の上に。」

素戔嗚は両腕を胸に組んで、やはり傲然と返事をした。

八

女たちは彼の答を聞くと、もう一度顔を見合せて笑い出した。

それが素戔鳴尊には腹も立てば同時にまた何となく嬉しいよすさのおのみこと

うな心もちもした。彼は醜い顔をしかめながら、故に彼等を脅すことさら
べく、一層不機嫌らしい眼つきを見せた。ふきげん

「何が可笑しい？」おほか

が、彼等には彼の威嚇も、一向効果がないらしかった。彼等は
さんざん笑ってから、ようやく彼の方を向くと、今度はもう一人
がやや恥しそうに、美しい領巾を弄びながら、ひれもてあそ

「じゃどうしてまた、あすこから下りていらしたの？」と云つ

た。

「鳩はとを助けてやろうと思つたのだ。」

「私あたしたちだつて助けてやる心算つもりでしたわ。」

三番目の娘は笑いながら、活いき活いきと横合いから口を出した。

彼女はまだ童女の年輩から、いくらも出てはいないらしかった。

が、二人の友だちに比べると、顔も一番美しければ、容ようす子もすぐ

れて澆はつらつ澆はつらつとしていた。さつき竹籠を投げ捨てながら、危く鳩を

捕えようとしたのも、この利り発はつらしい娘に違いなかつた。彼は彼

女と眼を合わすと、何な故げと云う事もなく狼ろう狽ばいした。が、それだ

けに、また一方では、彼女の前にその慌あわて方を見せたくないと言

う心もちもあつた。

「嘘をつけ。」

彼は一生懸命に、乱暴な返事を抛りつけた。が、その嘘でない事は、誰よりもよく彼自身が承知していそうな気もちがしていた。「あら、嘘なんぞつくものですか。ほんとうに助けてやる心算でしたわ。」

彼女がこう彼をたしなめると、面白そうに彼の当惑を見守っていた二人の女たちも、一度に小鳥のごとくしゃべり出した。

「ほんとうですわ。」

「どうして嘘だと御思い？」

「あなたばかり鳩が可愛いのじやございません。」

彼はしばらく返答も忘れて、まるで巢を壊された蜜蜂のごと

く、三方から彼の耳を襲つて来る女たちの声に驚嘆していた。が、やがて勇気を振り起すと、胸に組んでいた腕を解いて、今にも彼等を片つ端から薙なぎ倒たおしそんな擬勢ぎせいを示しながら、雷いかずちのように怒鳴りつけた。

「うるさい。嘘でなければ、早く向うへ行け。行かないと、——」
女たちはさすがに驚いたらしく、慌あわてて彼の側かたわらを飛びのいた。

が、すぐにまた声を立てて笑いながら、ちようど足もとに咲いていた嫁菜よめなの花を摘み取つては、一いっせい斉せいに彼へ抛りつけた。薄紫の嫁菜の花は所嫌わず紛々と、素戔嗚尊の体に降りかかった。彼はこの匀においの好い雨を浴びたまま、呆氣あつけにとられて立ちすくんでいた。が、たちまち今怒鳴りつけた事を思い出して、両腕を大きく開く

や否や、猛然と悪戯いたずらな女たちの方へ、一二足三足突進した。

彼等はしかしその瞬間に、素早く林の外へ逃げて行つた。彼は茫然と立ち止どまつたなり、次第に遠くなる領巾ひれの色を、見送るともなく見送つた。それからあたりの草の上に、点々と優しくこぼれている嫁菜の花へ眼をやつた。すると何故なぜか薄笑いが、自然くちびると唇のぼに上つて来た。彼はごろりとそこへ横になつて、芽をふいた梢の向うにある、麗うららかな春の空を眺めた。林の外ではかすかながら、まだ女たちの笑い声が聞えた。が、間もなくそれも消えて、後あとにはただ草木さかえの栄を孕はらんだ、明るい沈黙があるばかりになつた。：

：
何分なんぶんか後のち、あの羽根きずつを傷けた山鳩は、怯おず怯おずまたそこへ還かえ

つて来た。その時もう草の上の彼は、静な寢息を洩らしていた。が、仰向あおむいた彼の顔には、梢から落ちる日の光と一しよに、未だに微笑の影があつた。鳩は嫁菜の花を踏みながら、そつと彼の近くへ来た。そうして彼の寢顔を覗くと、仔細らしく首を傾けた。あたかもその微笑の意味を考えようとでもするように。――

九

その日以来、彼の心の中には、あの快活な娘の姿が、時々鮮かに浮ぶようになった。彼は前にも云つたごとく、彼自身にもこう云う事実を認める事が恥しかった。まして仲間の若者たちには、

ひとこと
一言もこの事情を打ち明けなかった。また実際仲間の若者たち

も彼の秘密を嗅ぎつけるには、余りに平生の素戔鳴が、恋愛と

は遙に縁の遠い、野蛮な生活を送り過ぎていた。

彼は相不変人を避けて、山間の自然に親しみ勝ちであつた。

どうかすると一夜中、森林の奥を歩き廻つて、冒険を探す事も

ないではなかつた。その間に彼は大きな熊や猪などを仕止めたこ

とがあつた。また時にはいつになつても春を知らない峰を越えて、

岩石の間に棲んでいる大鷲を射殺しにも行つたりした。が、彼

は未嘗、その非凡な膂力を尽すべき、手強い相手を見出

さなかつた。山の向うに穴居している、慄悍の名を得た侏

儒でさえ彼に出合う度毎に、必ず一人ずつは屍骸になつた。彼は

その屍骸から奪った武器や、矢先にかけて鳥獸を時々部落へ持つて歸った。

その内に彼の武勇の名は、益々多くの敵味方を部落の中につくつて行つた。従つて彼等は機会さえあると、公然と唾いがみ合う事を憚はばからなかつた。彼は勿論出来るだけ、こう云う争いを起させまいとした。が、彼等は彼等自身のために、彼の意嚮いこうには頓着なく、ほとんど何事にも軋あつれき轢し合つた。そこには何か宿命的な、必然の力も動いていた。彼は敵味方の反目に不快な感じを抱きながら、しかもその反目のただ中へ、我知らず次第に引き込まれて行つた。

現に一度はこう云うことがあつた。

ある麗かな春の日暮、彼は弓矢をたばさみながら、部落の後に
拡がっている草山を独り下つて来た。その時の彼の心の中には、
さつき射損じた一頭の牡鹿が、まだ折々は未練がましく、鮮かな
姿を浮べていた。ところが草山がやや平になつて、一本の楡の若
葉の下に、夕日を浴びた部落の屋根が一目に見えるあたりまで来
ると、そこには四五人の若者たちが、一人の若者を相手にして、
頻に何か云い争つていた。彼等が皆この草山へ、牛馬を飼いに來
るものたちだと云う事は、彼等のまわりに草を食んでいる家畜を
見ても明らかであつた。殊にその一人の若者は、彼を崇拜する若
者たちの中でも、ほとんど奴僕のごとく彼に仕えるために、反つ
て彼の反感を買つた事がある男に違ひなかつた。

彼は彼等の姿を見ると、咄嗟とつぎに何事が起りそうな、忌わしい予感に襲われた。しかしここへ来かかった以上、元もとより彼等の口論を見て過ぎる訳にも行かなかつた。そこで彼はまず見覚えのある、その一人の若者に、

「どうしたのだ。」と声をかけた。

その男は彼の顔を見ると、まるで百万の味方にも遭あつたように、嬉しそうに眼を輝かせながら、相手の若者たちの理不りふ尽じんな事を滔とう々と早口にしゃべり出した。何でもその言葉によると、彼等はその男を憎むあまり、彼の飼っている牛馬をも傷きずけたり虐いじめたりするらしかった。彼はそう云う不平を鳴す間も、時々相手を睨にらみつけて、

「逃げるなよ。今に返報をしてやるから。」などと、素戔鳴の勇力を笠に着た、横柄おうへいな文句を並べたりした。

十

素戔鳴すさのおは彼の不平を聞き流してから、相手の若者たちの方を向いて、野蛮やばんな彼にも似合わない、調停の言葉を述べようとした。するとその刹那せつなに彼の崇拜者は、よくよく口惜くちおしさに堪え兼ねたのか、いきなり近くにいた若者に飛びかかると、したたかその頬ほおを打ちのめした。打たれた若者はよろめきながら、すぐにまた相手へ掴つかみかかった。

「待て。こら、待てと云つたら待たないか。」

こう叱りながら素戔鳴は、無理に二人を引き離そうとした。ところが打たれた若者は、彼に腕を掴まれると、血迷つた眼を嗔いからせながら、今度は彼へ獅し噛がみついて来た。と同時に彼の崇拜者は、腰にさした鞭むちをふりかざして、まるで気でも違つたように、やはり口論の相手だつた若者たちの中へ飛びこんだ。若者たちも勿論この男に、おめおめ打たれるようなものばかりではなかつた。彼等は咄とっさ嗟さに二組に分れて、一方はこの男を囲むが早いか、一方は不慮の出来事に度どを失つた素戔鳴へ、紛々こぶしと拳を加えに来た。ここに立ち至つてはもう素戔鳴にも、喧嘩に加わるよりほかに途みちはなかつた。のみならずついに相手の拳が、彼の頭こうべに下つた時、彼

は理非も忘れるほど真底しんそこから一時に腹が立った。

たちまち彼等は入り乱れて、互に打ったり打たれたりし出した。あたりに草を食はんでいた牛や馬も、この騒ぎに驚いて、四方へ一度に逃げて行つた。が、それらの飼い主たちは拳を揮ふるうのに夢中になつて、しばらくは誰も家畜の行方ゆくえに気をとめる容子ようすは見えなかつた。

が、その内に素戔鳴と争つたものは、手を折られたり、足を挫くじかれたりして、だんだん浮き足が立つようになつた。そうしてとうとうしまいには、誰からともなく算を乱して、意気地いくじなく草山を逃げ下くだつて行つた。

素戔鳴は相手を追い払うと、今度は彼の崇拜者が、まだ彼等に

未練があるのを押し止めなければならなかった。

「騒ぐな。騒ぐな。逃げるものは逃がしてやるのが好いのだ。」

若者はやっと彼の手を離れると、べたりと草の上へ坐ってしまつた。彼が手ひどく殴なぐられた事は、一面に地腫じぼれのした彼の顔が、明白に語っている事実であつた。素戔嗚は彼の顔を見ると、腹立たしい心のどん底から、急に可笑おかしさがこみ上げて来た。

「どうした？ 怪我けがはしなかつたか？」

「何、したってかまいはしません。今日と云う今日こそあいつらに、一泡吹かせてやったのですから。——それよりあなたこそ、御怪我はありませんか。」

「うん、瘤こぶが一つ出来ただけだつた。」

素戔鳴はこう云う一言に忌々しさを吐き出しながら、そこにあつた一本の楡にれの根本ねもとに腰を下した。彼の眼の前には部落の屋根が、草山の腹にさす夕日の光の中に、やはり赤々と浮き上つていた。その景色が素戔鳴には、不思議に感じるくらい平和に見えた。それだけまた今までの格闘かくとうが、夢のような気さえしないではなかつた。

二人は草を敷いたまま、しばらくは黙つて物静な部落の日暮を見下していた。

「どうです。瘤は痛みますか。」

「大して痛まない。」

「米こめを噛かんでつけて置くかと好いいそうですよ。」

「そうか。それは好い事を聞いた。」

十一

ちようどこの喧嘩けんかと同じように、素戔すさの鳴は次第にある一団の若者たちを嫌でも敵にしなければならなくなつた。しかしそれが数の上から云うと、ほとんどこの部落の若者たちの三分の二以上の多数であつた。この連中は彼の味方が、彼を首領と仰ぐように、おもいかねのみこと思兼尊たちからおのみことだの手力雄尊ねんちようじゃだのと云う年長者ねんちようじゃに敬意を払つていた。しかしそれらの尊みことたちは、格別彼に敵意らしい何物も持っていないらしかつた。

殊に思兼尊などは、むしろ彼の野蛮な性質に好意を持っているようであった。現にあの草山の喧嘩から、二三日経つたある日の午後、彼が例のごとくたった一人、山の中の古沼へ魚を釣りに行っている、偶然そこへ思兼尊が、これも独り分け入って来た。そうして隔意なく彼と一しよに、朽木の幹へ腰を下して、思いのほか打融うちとけた世間話などをし始めた。

みこと尊はもう髪も髯も白くなつた老人ではあるが、部落第一の学者でもあり、予かねてまた部落第一の詩人と云う名誉も担になつていた。その上部落の女たちの中には、尊を非凡な呪物師まじものしのように思っているものもないではなかつた。これは尊が暇さえあると、山さんこ谷くの間をさまよい歩いて、薬草などを採して来るからであつた。

彼は勿論思兼尊に、反感を抱くべき理由がなかった。だから糸を垂たれたまま、喜んで尊の話相手になった。二人はそこで長い間、古沼に臨んだ柳の枝が、銀しろがねのような花をつけた下に、いろいろな事を話し合った。

「近頃はあなたの剛力ごうりきが、大分評だいぶんひょう判ばんのようじゃありませんか。」

しばらくしてから思兼尊は、こう云つて、片頬かたほに笑えみを浮べた。

「評判だけ大きいのです。」

「それだけでも結構ですよ。すべての事は評判があつて、始めてあり甲斐がいがあるのですから。」

素戔嗚にはこの答が、一向腑ふに落ちなかつた。

「そうでしようか。じゃ評判がなかったら、いくら私が剛力でも

——

「さらに剛力ではなくなるのです。」

「しかし人が掬すくわなくつても、砂しやきん金はじめは始から砂金でしょう。」

「さあ、砂金だとわかるのは、人に掬すくわれてからの上じゃありませんか。」

「すると人が、ただの砂を砂金だと思つて掬すくつたら——」

「やはりただの砂でも砂金になるでしょう。」

素戔鳴は何だか思兼尊に、調からか戯かわれているような心もちがした。

が、そうかと思つて相手を見ても、尊の皺しわだらけな目尻けしきには、ただ微笑が宿すくっているばかりで、人の悪そうな気色は少しもなかつ

た。

「何だかそれじゃ砂金になつても、つまらないような気がしますが。」

「勿論つまらないものなのですよ。それ以上に考えるのは、考える方が間違つていのです。」

思兼尊はこう云うと、実際つまらなそうな顔をしながら、どこかで摘んで来たらしい^{ふき}蔦の^{とう}臺の^{おい}勻を^か嗅ぎ始めた。

十二

素^す淺^さ鳴^のはしばらく黙っていた。するとまた^{おも}思^い兼^か尊^ねが彼の^み

非凡な腕力へ途切れた話頭を持つて行つた。

「いつぞや力ちからくら競べがあつた時、あなたと岩を擡もたげ合つて、死んだ男がいたじやありませんか。」

「気の毒な事をしたものです。」

素戔鳴は何となく、非難でもされたような心もちになつて、思わず眼を薄うすび日がさした古沼ふるぬまの上へ漂ただよわせた。古沼の水は底深そうに、まわりに芽めぐんだ春の木々をひっそりと仄ほの明るく映してゐた。しかし思兼尊は無頓着に、時々露の臺へ鼻をやつて、

「気の毒ですが、莫迦ぼかげていますよ。第一私わたしに云わせると、競争する事がすでによくなく、第二に到底勝てそうもない競争をするのが論外です。第三に命まで捨てるに至つては、それこそ愚ぐ

の骨頂こつちようじゃありませんか。」

「しかし私わたくしは何となく気が咎とがめてならないのですが。」

「何、あれはあなたが殺したのじゃありません。力競べを面白がっていた、ほかの若者たちが殺したのです。」

「けれども私はあの連中に、反かえって憎にくまれているようです。」

「それは勿論憎まれますよ。その代りもしあなたが死んで、あなたの相手が勝負に勝ったら、あの連中はきつとあなたの相手を憎んだのに違ちがいなしでしょう。」

「世の中はそう云うものでしょうか。」

その時尊みことは返事をする代りに、「引いていきますよ」と注意した。素戔嗚はすぐに糸を上げた。糸の先には山目やまめが一尾いちび、澁はつらつ瀬と

銀のように躍おどっていた。

「魚は人間より幸福ですね。」

尊は彼が竹の枝を山目の顎へ通すのを見ると、またにやにや笑いながら、彼にはほとんど通じない一種の理窟を並べ出した。

「人間が鉤かぎを恐れている内に、魚は遠慮なく鉤を呑んで、樂々と一思いに死んでしまう。私は魚が羨うらやましいような気がしますよ。」

彼は黙つてもう一度、古沼へ糸を抛ほうりこんだ。が、やがて当惑らしい眼を尊へ向けて、

「どうもあなたのおっしゃる事は、私にはよく分りませんが。」と云つた。

尊は彼の言葉を聞くと、思いのほか真面目まじめな調子になって、白

い顎髯あごひげを捻ひねりながら、

「わからない方が結構ですよ。さもないとあなたも私のように、何もする事が出来なくなります。」

「どうしてですか。」

彼はわからないと云う口の下から、すぐまたこう尋ねずにはいられなかった。実際思兼尊の言葉は、真面目とも不真面目ともつかない内に、蜜か毒薬か、不思議なほど心を惹ひくものが潜ひそんでいたものであった。

「鉤かぎが呑めるのは魚だけです。しかし私も若い時には——」

思兼尊の皺しわだらけな顔には、一瞬間いつにない寂しそうな色が去来した。

「しかし私も若い時には、いろいろ夢を見た事がありましたよ。」
 二人はそれから久しい間、互に別々な事を考えながら、静に春
 の木々を映している、古沼の上を眺めていた。沼の上には翡翠
 が、時々水を掠めながら、礫を打つように飛んで行つた。

十三

その間もあの快活な娘の姿は、絶えず素戔鳴の心を領してい
 た。殊に時たま部落の内外で、偶然彼女と顔を合わせると、ほと
 んどあの山腹の柏の下で、始めて彼女と遇つた時のように、訳も
 なく顔が熱くなつたり、胸がはずんだりするのが常であつた。が、

彼女はいつも取澄まして、全然彼を見知らないかのごとく、頭を下げる容子ようすも見せなかつた。――

ある朝彼は山へ行く途中、ちようど部落のはずれにある噴き井ふみずの前を通りかかると、あの娘が三四人の女たちと一しよに、水甕めづへ水を汲くんでいるのに遇あつた。噴き井の上には白椿しろつばきが、まだ疎まばらに咲き残つて、絶えず湧きこぼれる水の水沫しづきは、その花と葉とを洩もれる日の光に、かすかな虹にじを描えいていた。娘は身をかがめながら、苔蒸こけむした井筒いづつに溢あふれる水を素焼すやきの甕かめへ落おしていたが、ほかの女たちはもう水を汲くみ了おえたのか、皆甕を頭に載せて、しつきりなく飛び交かう燕つばくらの中を、家々へ帰ろうとする所であつた。が、彼がそこへ来た途端とたんに、彼女は品良ひんよく身を起すと、一ぱいに

なつた水甕を重そうに片手に下げたまま、ちらりと彼の顔へ眼をやつた、そうしていつになく、人懐しげに口元へ微笑を浮べて見せた。

彼は例の通り当惑しながら、ちよいと挨拶あいさつの點頭じぎを送つた。

娘は水甕を頭へ載せながら、眼でその挨拶に答えると、仲間の女たちの後あとを追つて、やはり釘くぎを撒まくような燕つばきの中を歩き出した。

彼は娘と入れ違いに噴井ふきいの側へ歩み寄つて、大きな掌たなごころへ掬すくつた水

に、二口三口喉のどを沾うるした。沽しながら彼女の眼つきや唇の微笑を

思い浮べて、何か嬉しいような、恥かしいような心もちに顔を赤めていた。と同時にまた己おのれ自身あざけを嘲あざけりたいような気もしないではなかつた。

その間に女たちはそよ風に領巾ひれをひるがええしながら、頭の上の素焼の甕にさわやかな朝日の光を浴びて次第に噴き井ふから遠ざかつて行った。が、間もなく彼等の中からは一度に愉快そうな笑い声が出た。それにつれて彼等のある者は、笑顔を後うしろへ振り向けながら、足も止めずに素戔鳴の方へ、嘲るような視線を送りなぞした。

噴き井の水を飲んでいた彼は、幸さいわいその視線に煩わづらわされなかつた。しかし彼等の笑い声を聞くと、いよいよ妙に間が悪くなって、今更飲なかだみたくもない水を、もう一杯手で掬かつて飲んだ。すると中なかだ高かになつた噴き井の水に、意外にも誰か人の姿が、咄とつさ嗟さに覺おぼつ束つかない影を落した。素戔鳴は慌あわてた眼を挙げて、噴き井の向うの白椿の下へ、鞭むちを持った一人の若者が、のそのそと歩み寄つたの

と顔を合せた。それは先日草山の喧嘩に、とうとう彼まで巻添まきぞえにした、あの牛飼うしかいの崇拜者であつた。

「お早うございます。」

若者は愛想あいそ笑いを見せながら、恭うやうやしく彼に会釈えしやくをした。

「お早う。」

彼はこの若者にまで、狼狽ろうばいした所を見られたかと思うと、思わず顔をしかめずにはいられなかつた。

十四

が、若者はさり気げない調子で、噴き井の上に枝垂しだれかかつた白

椿の花を^{むし}りながら、

「もう瘤^{こぶ}は御癒^{おなほ}りですか。」

「うん、とうに癒^{なほ}った。」

彼は真面目にこんな返事をした。

「生^{なまごめ}米を御つけになりましたか。」

「つけた。あれは思ったより利^きき目があるらしかった。」

若者は^{むし}った椿の花を噴き井の中へ抛りこむと、急にまたにやにや笑いながら、

「じゃもう一つ、好い事を御教えしましょうか。」

「何だ。その好い事と云うのは。」

彼が不審^{ふしん}そうにこう問返すと、若者はまだ意味ありげな笑^{えみ}を頬

に浮べたまま、

「あなたの頸くびにかけて御出でになる、勾玉まがたまを一つ頂かせて下さい。」と云った。

「勾玉をくれ？ くれと云えばやらないものでもないが、勾玉を貰つてどうするのだ？」

「まあ、黙つて頂かせて下さい。悪いようにはしませんから。」
 「嫌だ。どうするのだか聞かない内は、勾玉などをやる訳には行かない。」

素戔すさのお鳴はそろそろ焦じれ出しながら、突慳つっけんどん貪どんに若者こゝいしりぞの請こゝいを却りぞけた。すると相手は狡ことうかつ猾かつそうに、じろりと彼の顔へ眼をやつて、
 「じや云いますよ。あなたは今ここへ水を汲みに来ていた、十五

六の娘が御好きでしょう。」

彼は苦い顔をして、相手の眉の間を睨みつけた。が、内心は少からず、狼狽に狼狽を重ねていた。

「御好きじゃありませんか、あの思兼尊の姪を。」

「そうか。あれは思兼尊の姪か。」

彼は際どい声を出した。若者はその容子を見ると、凱歌を挙げるように笑い出した。

「そら、御覧なさい。隠したつてすぐに露われます。」

彼はまた口を噤んで、じつと足もとの石を見つめていた。水沫を浴びた石の間には、疎に羊歯の葉が芽ぐんでいた。

「ですから私に勾玉を一つ、御よこしなさいと云うのです。御好

きならまた御好きのように、取計らいようもあるじやありませんか。」

若者は鞭むちもてを弄あそびながら、透すかさず彼を追窮した。彼の記憶には二三日前に、思兼尊と話し合つた、あの古沼のほとりの柳の花が、たちまち鮮あざやかに浮んで来た。もしあの娘が尊の姪なら——彼は眼を足もとの石から挙げると、やはり顔をしかめたなり、

「そうして勾玉をどうするのだ？」と云つた。

しかし彼の眼の中には、明かに今まで見えなかつた希望の色が動いていた。

若者の答えは無造作むぞうさであつた。

「何、その勾玉をあの娘に渡して、あなたの思召しを伝えるので
す。」

素戔すさのお鳴はちよいとためらつた。この男の弁舌を弄ろうする事は、何
となく彼には不快であつた。と云つて彼自身、彼の心を相手に訴
えるだけの勇氣もなかつた。若者は彼の醜い顔に躊躇ちゆうちよの色が
動くのを見ると、わざと冷やかに言葉を継ついだ。

「御嫌おいやなら仕方はありませんが。」

二人はしばらくの間黙つていた。が、やがて素戔すさのお鳴は頸くびに懸け
た勾玉まがたまの中から、美しい琅玕ろうかんの玉を抜いて、無言のまま若者

の手に渡した。それは彼が何よりも、大事にかけて持っている、
 歿なくなつた母の遺物かたみであつた。

若者はその琅玕に物欲しそうな眼を落しながら、

「これは立派な勾玉ですね、こんな性たちの好い琅玕は、そう沢山は
 ありますまい。」

「この国の物じやない。海の向うにいる玉たま造つくりが、七日七晩
 磨いたと云う玉だ。」

彼は腹立たしそうにこう云うと、くるりと若者に背せなを向けて、
 大股に噴ふき井いから歩み去つた。若者はしかし勾玉てのひらを掌の上に載せ
 ながら、慌あわてて後を追いかけて来た。

「待つていて下さい。必ず二三日中には、吉左右きつそうを御聞かせしま

すから。」

「うん、急がなくなつて好いが。」

彼等は倭衣しずりの肩を並べて、絶え間なく飛び交う燕かつばくらの中を山の方へ歩いて行つた。後には若者の投げた椿の花が、中高なかだかになつた噴き井の水に、まだくるくる廻りながら、流れもせず浮んでいた。

その日の暮くれ方がた、若者は例の草山の楡いれの根がたに腰を下して、また素戔嗚に預けられた勾玉を掌へ載せて見ながら、あの娘に云い寄るべき手段をいろいろ考えていた。するとそこへもう一人の若者が、斑竹はんちくの笛ふえを帯へさして、ぶらりと山を下つて来た。それは部落の若者たちの中でも、最も精巧な勾玉くしろや釧くしろの所有者として知られている、背せいの高い美貌びぼうの若者であつた。彼はそこを通り

かかると、どう思ったかふと足を止めて、楡の下の若者に「おい、君。」と声をかけた。若者は慌てて、顔を挙げた。が、彼はこの風流な若者が、彼の崇拜する素戔鳴の敵の一人だと云う事を承知していた。そこでいかにも無愛想ぶあいそに、

「何か御用ですか。」と返事をした。

「ちよいとその勾玉を見せてくれないか。」

若者は苦にがい顔をしながら、琅玕を相手の手に渡した。

「君の玉かい。」

「いいえ、素戔すさのおのみこと鳴尊の玉です。」

今度は相手の若者の方が、苦い顔をせずにはいられなかった。

「じやいつもあの男が、自慢じまんそうに下げている玉だ。もつともこ

のほかの下げているのは、石塊いしころ同様の玉ばかりだが。」

若者は毒どくぐち口を利きながら、しばらくその勾玉もてあそを弄んでいたが、

自分もその楡の根がたへ楽々と腰を下すと、

「どうだろう。物は相談と云うが、一つ君の計らいで、この玉を僕に売ってくれまいか。」と、大胆な事を云い出した。

十六

牛飼いの若者は否いやと返事をする代りに、頬ほおを脹ふくらせたまま黙っていた。すると相手は流し眼に彼の顔を覗きこんで、

「その代り君には御礼をするよ。刀が欲しければ刀を進上するし、

玉が欲しければ玉も進上するし、——」

「駄目ですよ。その勾まがたま玉は素戔すさのおのみこと鳴尊が、ある人に渡してくれと云つて、私に預けた品なのですから。」

「へええ、ある人へ渡してくれ？ ある人と云うのは、ある女と云う事かい。」

相手は好奇心を動かしたと見えて、急に氣ごんだ調子になった。
「女でも男でも好いじやありませんか。」

若者は余計なおしやべりを後悔しながら面倒臭かえそうにこう答を避けた。が、相手は腹を立てた気色けしきもなく、反かえつて薄気味が悪いほど、優しい微笑を漏もらしながら、

「そりやどっちでも好いさ。どっちでも好いが、その人へ渡す品

だったら、そこは君の働き一つで、ほかの勾玉を持って行つても、大した差さしつかえ支かえはなさそうじゃないか。」

若者はまた口を噤つぶんで、草の上へ眼を反そらせていた。

「勿論多少は面倒が起るかも知れないさ。しかしそのくらいな事はあつても、刀なり、玉なり、鎧よろいなり、乃至ないしはまた馬の一匹なり、君の手にはいった方が——」

「ですがね、もし先方が受け取らないと云つたら、私はこの玉を素戔嗚尊へ返さなければならぬのですよ。」

「受け取らないと云つたら？」

相手はちよいと顔をしかめたが、すぐに優しい口調に返つて、

「もし先方が女だったら、そりや素戔嗚の玉などは受け取らない

ね。その上こんな琅玕ろうかんは、若い女には似合わないよ。だから反かえつてこの代りに、もつと派手はでな玉を持って行けば、案外すぐに受け取るかも知れない。」

若者は相手の云う事も、一理ありそうな気がし出した。実際にかに高貴な物でも、部落の若い女たちが、こう云う色の玉を好むかどうか、疑わしいには違いなかつたのであつた。

「それからだね——」

相手は唇くちびるを舐めながら、いよいよもつともらしく言葉を継いだ。「それからだね、たとい玉が違つたにしても、受け取つて貰つた方が、受け取らずに返されるよりは、素戔鳴も喜ぶだろうじゃないか。して見れば玉は取り換えた方が、反かえつて素戔鳴のためにな

るよ。素戔嗚のためになつて、おまけに君が刀でも、馬でも手に入れるとなれば、もう文句はない筈だがね。」

若者の心の中には、両方に刃のついた劍つるぎやら、水晶を削けずつた勾玉やら、逞たくましい月毛つきげの馬やらが、はつきりと浮び上つて来た。彼は誘惑を避けるように、思わず眼をつぶりながら、二三度頭を強く振つた。が、眼を開けると彼の前には、依然として微笑を含んでいる、美しい相手の顔があつた。

「どうだろう。それでもまだ不服かい。不服なら——まあ、何とか云うよりも、僕の所まで来てくれ給え。刀も鎧よろいもちようど君に御おあつら誂つらえなのがある筈だ。厩うまやには馬も五六匹いる。」

相手は飽くまでも滑なめらかな舌なめらかを弄しながら気軽にれく楡にれの根がたを立ち

上った。若者はやはり黙念もくねんと、煮え切らない考えに沈んでいた。しかし相手が歩き出すと、彼もまたその後あとから、重そうな足を運び始めた。――

彼等の姿が草山の下に、全く隠れてしまった時、さらに一人の若者が、のそのそそこへ下くだつて来た。夕日の光はとうに薄れて、あたりにはもう靄もやさえ動いていたが、その若者が素戔鳴だと云う事は、一目見てさえ知れる事であった。彼は今日射止めたらしい山鳥を二三羽肩にかけて、悠々と楡の下まで来ると、しばらく疲れた足を休めて、暮色の中に横たわっている部落の屋根を見下した。そうして独り唇に幸福な微笑ただよを漂わせた。

何も知らない素戔鳴は、あの快活な娘の姿を心に思い浮べたの

であつた。

十七

素^す淺^さ鳴^のは一日一日と、若者の返事を待ち暮した。が、若者はいつになつても、容易に消息を齋^もさ^たらなかつた。のみならず故意か偶然か、ほとんどその後素淺鳴とは顔も合さないうらいであつた。彼は若者の計画が失敗したのではないかと思つた。そのために彼と会う事が恥しいのではないかと思つた。が、そのまた一方では、やはりまだあの快活な娘に、近づく機会がないのかも知れないと思ひ返さずにはいられなかつた。

その間に彼はあの娘と、朝早く同じ噴き井の前で、たつた一度落合つた事があつた。娘は例のごとく素焼の甕を頭の上に載せながら、四五人の部落の女たちと一しよに、ちようど白椿の下を去ろうとしていた。が、彼の顔を見ると、彼女は急に唇を歪めて、蔑むような表情を水々しい眼に浮べたまま、昂然と一人先に立つて、彼の傍を通り過ぎた。彼はいつもの通り顔を赤めた上に、その日は何とも名状し難い不快な感じまで味わされた。「おれは莫迦だ。あの娘はたとい生まれ変つても、おれの妻になるよくな女ではない。」——そう云う絶望に近い心もちも、しばらくは彼を離れなかつた。しかし牛飼の若者が、否やの返事を持つて来ない事は、人の好い彼に多少ながら、希望を抱かせる力になつ

た。彼はそれ以来すべてをこの未知の答えに懸けて、二度と苦しい思いをしないために、当分はあの噴き井の近くへも立ち寄るまいと私ひそかに決心した。

ところが彼はある日の日暮、天あめの安河やすかわの河原かわらを歩いていると、折からその若者が馬を洗っているのに出会った。若者は彼に見つかった事が、明かに気まずいようであった。同時に彼も何となく口きが利にくき悪いき気もちになつて、しばらくは入日いりひの光に煙かつた河かわら原よもぎ蓬たの中たへ佇たみながら、艶つや々と水をかぶっている黒馬けなみの毛並けなみを眺めていた。が、追い追おいその沈黙が、妙に苦しくなり始めたので、とり敢えず話題を開拓すべく、目前の馬を指さしながら、

「好い馬だな。持主は誰だい。」と、まず声をかけた。すると意

外にも若者は得意らしい眼を挙げて、

「私です。」と返事をした。

「そうか。そりや——」

彼は感嘆の言葉を呑みこむと、また元の通り口を噤んでしまつた。が、さすがに若者は素知らぬ顔も出来ないと見えて、

「先^{せん}達^{だつて}あの勾^{まが}玉^{たま}を御預りしましたが——」と、ためらい勝ちに切り出した。

「うん、渡してくれたかい。」

彼の眼は子供のように、純粹な感情を湛^{たた}えていた、若者は彼と眼を合わすと、慌^{あわ}ててその視線を避けながら、故^{こと}に馬^{うま}の足搔^{あが}くの
を叱^しつて、

「ええ、渡しました。」

「そうか。それでおれも安心した。」

「ですが——」

「ですが？ 何だい。」

「急には御返事が出来ないと言う事でした。」

「何、急がなくても好い。」

彼は元氣よくこう答えると、もう若者には用がないと云つたように、夕霞ゆうがすみのたなびいた春の河原を元来た方へ歩き出した。

彼の心の中には、今までにない幸福の意識が波立っていた。河原蓬も、空も、その空に一羽啼ひばりいている雲雀も、ことごとく彼には嬉しうであつた。彼は頭かしらを挙げて歩きながら、危く霞に紛れそ

うな雲雀と時々話をした。

「おい、雲雀。お前はおれが羨ましそうだな。羨ましくない？
嘘をつけ。それなら何故なぜそんなに啼き立てるのだ。雲雀。おい、
雲雀。返事をしないか。雲雀。……」

十八

素戔すさの鳴おはそれから五六日の間、幸福そのもののような日を送つた。ところがその頃から部落には、作者は誰とも判然しない、新しい歌が流行り出した。それは醜みにくい山やまがらす鴉すが美しい白はくちよう鳥うに恋をして、ありとあらゆる空の鳥の晒わらい物になったと云う歌であ

った。彼はその歌が唱われるのを聞くと、今まで照していた幸福の太陽に、雲が懸ったような心もちがした。

しかし彼は多少の不安を感じながら、まだ幸福の夢から覚めずにいた。すでに美しい白鳥は、醜い山鴉の恋を容れてくれた。ありとあらゆる空の鳥は、愚な彼を晒うのではなく、反つて仕合せな彼を羨んだり妬んだりしているのであった。——そう彼は信じていた。少くともそう信ぜずにはいられないような気がしていた。だから彼はその後また、あの牛飼の若者に遇つた時も、ただ同じ答を聞きたいばかりに、

「あの勾まがたま玉は確かに渡してくれたのだらうな。」と、軽く念を押しただけであつた。若者はやはり間の悪るような顔をしながら、

「ええ、確かに渡しました。しかし御返事の所は——」とか何とか、曖昧あいまいに言葉を濁していた。それでも彼は渡したと云う言葉に満足して、その上立ち入った事情などは尋ねようとも思わなかった。

すると三四日経ったある夜の事、彼が山へ寝鳥ねどりでも捕えに行こうと思つて、月明りを幸さいわい、部落の往来を独りぶらぶら歩いていると、誰か笛を吹きすさびながら、薄い靄もやの下りた中を、これも悠々と来かかるものがあつた。野蛮やばんな彼は幼い時から、歌とか音楽とか云うものにはさらに興味を感じなかつた。が、藪木やぶきの花の匂においのする春の月夜に包まれながら、だんだんこちらへやって来る笛の声に耳を傾けるのは、彼にとつても何となく、心憎い気をする

ものであつた。

その内に彼とその男とは、顔を合せるばかりに近くなつて来た。しかし相手は鼻の先へ来て、あいかわらず相不変笛を吹き止めなかつた。彼は路を譲りながら、天心に近い月を負つて、相手の顔を透すかして見た。美しい顔、きら燦びやかな勾玉、それから口に当てた斑竹はんちくの笛——相手はあの背せいの高い、風流な若者に違ちがいなかつた。彼は勿論この若者が、彼の野性を軽蔑する敵の一人だと云うことを承知していた。そこで始は昂然と肩を挙げて、挨拶もせずに通り過ぎようとした。が、いよいよ二人がすれ違ちがうとした時、何かもう一度彼の眼を若者の体へ惹ひきつけた。と、相手の胸の上には、彼の母が遺物かたみに残した、あの琅玕ろうかんの勾玉まがたまが、曇りない月の光

に濡れて、水々しく輝いていたではないか。

「待て。」

彼は咄嗟とっさに腕を伸ばすと、若者の襟えりをしっかり掴つかんだ。

「何をする。」

若者は思わずよろめきながら、さすがに懸命しほの力を絞しぼって、とられた襟を振り離そうとした。が、彼の手はさながら万まん力りきにかけたごとく、いくらもがいても離れなかった。

十九

「貴様はこの勾まが玉たまを誰に貰まった？」

素戔鳴は相手の喉をしめ上げながら噛みつくようにこう尋ねた。

「離せ。こら、何をする。離さないか。」

「貴様が白状するまでは離さない。」

「離さないと——」

若者は襟を取られたまま、斑竹はんちくの笛をふり上げて、横払いに相手を打とうとした。が、素戔鳴は手もとを緩めるまでもなく、遊んでいた片手を動かして、苦もなくその笛をじ取ってしまった。

「さあ、白状しろ。さもないと、貴様を絞殺しめころすぞ。」

実際素戔鳴の心の中には、狂暴な怒が燃え立っていた。

「この勾玉は——おれが——おれが馬と取換えたのだ。」

「嘘をつけ。これはおれが——」

「あの娘に」と云う言葉が、何故か素戔鳴の舌を硬こわばらせた。彼は相手の蒼ざめた顔に熱い息を吹きかけながら、もう一度唸うなるよ
うな声を出した。

「嘘をつけ。」

「離さないか。貴様こそ、——ああ、喉が絞しまる。——あれほど
離すと云った癖に、貴様こそ嘘をつく奴だ。」

「証拠があるか、証拠が。」

すると若者はまだ必死に、もがきながら、

「あいつに聞いて見るが好い。」と、吐き出すような、
一言ひとことを洩らした。「あいつ」がああ牛飼いの若者であると云う事は、怒

り狂った素戔嗚にさえ、問うまでもなく明かであった。

「よし。じゃ、あいつに聞いて見よう。」

素戔嗚は言下ごんかに意を決すると、いきなり相手を引つ立てながら、あの牛飼いの若者がたつた一人住んでいる、そこを余り離れていない小家の方こいえへ歩き出した。その途中も時々相手は、襟にかかった素戔嗚の手を一生懸命に振り離そうとした。しかし彼の手は相あいかわらず、不変、鉄のようにしつかり相手を捉とらえて、打つても、叩いても離れなかつた。

空には依然として、春の月があつた。往来にも藪木やぶきの花の匂においが、やはりうす甘く立ち罩こめていた。が、素戔嗚の心の中には、まるで大暴風雨の天のように、渦巻く疑惑の雲を裂さいて、憤怒ふんぬと嫉妬しつと

との稲妻が、絶え間なく閃き飛んでいた。彼を欺いたのはあの娘
であろうか。それとも牛飼いの若者であろうか。それともまたこ
の相手が何か狡こうかつ猾な手段を弄して、娘から勾玉を巻き上げたの
であろうか。……

彼ははずるずる若者を引きずりながら、とうとう目ざす小家まで
来た。見ると幸小家の主人は、まだ眠らずにいると見えて、仄ほのか
な一いっさん盞の燈ともしび火の光が、戸口に下げた簾すだれの隙から、軒先の月明
とせめ闘いでいた。襟をつかまれた若者は、ちようどこの戸口の前へ
来た時、始めて彼の手から自由になろうとする、最後の努力に成
功した、と思うと時ならない風が、さつと若者の顔を払って、足
さえ宙に浮くが早いか、あたりが俄にわかに暗くなつて、ただ一しきり

火花のような物が、四方へ散乱するような心もちがした。——彼は戸口へ来ると同時に、犬の子よりも造作なく、月の光を堰いた簾の内へ、まっさかさまに投げこまれたのであった。

二十

家の中にはあの牛飼の若者が、土器にともした油火の下に、夜なべの藁沓を造っていた。彼は戸口に思いがけない人のけいが聞えた時、一瞬間忙しい手を止めて、用心深く耳を澄ませたが、その途端に軒の簾が、大きく夜を煽ったと思うと、突然一人の若者が、取り乱した藁のまん中へ、仰向けざまに転げ落ちた。

彼はさすがに胆きもを消して、うっかりあぐらを組んだまま、半ば引きちぎられた簾の外へ、思わず狼狽ろうばいの視線を飛ばせた。するとそこには素戔鳴すさのおが、油火の光を全身に浴びて、顔中に怒りを漲みなぎらせながら、小山のごとく戸口を塞ふさいでいた。若者はその姿を見るや否や、死人のような色になって、しばらくただ狭い家の中をきよろきよろ見廻すよりほかはなかつた。素戔鳴は荒々しく若者の前へ歩み寄ると、じつと彼の顔を睨にらみ据えて、

「おい、貴様は確かにあの娘へ、おれの勾まがたま玉を渡したと云つたな。」と忌々いまいましそうな声をかけた。

若者は答えなかつた。

「それがこの男の頸くびに懸かっているのは一体どうした始末なのだ？」

素戔嗚はあの美貌の若者へ、燃えるような瞳ひとみを移した。が、彼はやはり藁の中に、気を失ったのか、仮死そらじにか、眼を閉じたまま倒れていた。

「渡したと云うのは嘘か？」

「いえ、嘘じゃありません。ほんとうです。ほんとうです。」

牛飼いの若者は、始めて必死の声を出した。

「ほんとうですが、——ですが、実はあの琅玕ろうかんの代りに、珊瑚さんご

の——その管玉くだたまを……」

「どうしてまたそんな真似まねをしたのだ？」

素戔嗚の声は雷いかづちのごとく、度を失った若者の心を一言毎ひとことごとに打

ち砕いた。彼はとうとうしどろもどろに、美貌の若者が勧める通すす

り、琅玕と珊瑚と取り換えた上、礼には黒馬を貰った事まで残りなく白状してしまつた。その話を聞いている内に、刻々素戔鳴の心の中には、泣きたいような、叫びたいような息苦しい羞憤しゅうふんの念が、大風のごとく昂たかまつて来た。

「そうしてその玉は渡したのだな。」

「渡しました。渡しましたが——」

若者はしゅんじゅん逡巡した。

「渡しましたが——あの娘は——何しろああ云う娘ですし、——
はくちよう白鳥はやまがらす山鴉になどと——、失礼な口上ですが、——受け

取らないと申し——」

若者は皆まで云わない内に、仰向けにどうと蹴倒けたおされた。蹴倒

されたと思うと、大きな拳こぶしがしたたか彼の頭を打った。その拍子に燈ともしび火の盞ささらが落ちて、あたりの床ゆかに乱れた藁わらは、たちまち、一面の炎になった。牛飼いの若者はその火に毛脛けすねを焼かれながら、悲鳴を挙げて飛び起きると、無我夢中に高たか這ばいをして、裏手の方へ逃げ出そうとした。

怒り狂った素戔鳴は、まるで傷きずつついた猪いのししのように、猛然とその後から飛びかかった。いや、将まさに飛びかかろうとした時、今度は足もとに倒れていた、美貌の若者が身を起すと、これも死物狂つるぎに剣を抜いて、火の中うちに片膝ひざついたまま、いきなり彼の足を払おうとした。

二十一

その劍の光を見ると、突然素戔鳴すさのおの心の中には、長い間眠つていた、流血あこがに憧れる野性が目ざめた。彼は素早く足ちぢちを縮めて、相手の武器を飛び越えると、咄嗟とつさに腰の劍を抜いて、牛の吼ほえるよ
うな声を挙げた。そうしてその声を挙げるが早いか、無二無三むにむさんに
相手へ斬つてかかった。彼等の劍は凄じい音を立てて、濛々もうもうと
渦巻く煙の中に、二三度眼に痛い火花を飛ばせた。

しかし美貌の若者は、勿論彼の敵ではなかつた。彼の振り廻す
幅広の劍は、一太刀毎ひとたちごとにこの若者を容赦ようしやなく死地へ追いこんで
行つた。いや、彼は数合の内に、ほとんど一氣に相手の頭を斬り

割る所まで肉薄していた。するとその途端に甕かめが一つ、どこからか彼の頭を目がけて、勢い好く宙を飛んで来た。が、幸さいわいそれは狙ねらいが外それて、彼の足もとへ落ちると共に、粉こなみじん微塵に碎けてしまった。彼は太刀打を続けながら、猛たげり立った眼を挙げて、忙いそがわしく家の中を見廻した。見廻すと、裏手の蓆むしろ戸の前には、さつき彼に後を見せた、あの牛飼いの若者が、これも眼を血走らせたまま、相手の危急を救うべく、今度は大きな桶を一つ、持ち上げている所であつた。

彼は再び牛のような叫び声を挙げながら、若者が桶を投げるより先に、渾身の力を剣にこめて、相手の脳天へ打ち下そうとした。が、その時すでに大きな桶は、炎の空に風を切つて、がんと彼の

頭に中あたつた。彼はさすがに眼が眩くらんだのか、大風に吹かれた旗はたぎ竿おのように思わずよろよろ足を乱して、危くそこへ倒れようとした。その暇に相手の若者は、奮然と身を躍らせると、——もう火の移った簾すだれを衝ついて、片手に劍つるぎを提ひげながら、静な外の春の月夜へ、一目散に逃げて行つた。

彼は齒を喰いしばつたまま、ようやく足を踏み固めた。しかし眼を開いて見ると、火と煙とに溢あふれた家の中には、とうに誰もいなくなつていた。

「逃げたな、何、逃げようと云つても、逃がしはしないぞ。」

彼は髪も着物も焼かれながら、戸口の簾すだれを切り払つて、蹠そうろうと家の外へ出た。月つき明あかりに照らされた往来は、屋根を燃え抜い

た火の光を得て、真昼のように明るかった。そうしてその明るい往来には、部落の家々から出て来た人の姿が、黒々と何人も立ち並んでいた。のみならずその人影は、剣を下げた彼を見ると、誰からともなく騒ぎ立って、「素戔嗚だ。素戔嗚だ。」と呼び交すかわ声が、たちまち高くなり始めた。彼はそう云う声を浴びて、しばらくはぼんやりたたず佇んで居た。また実際それよりほかに、何の分別もつかないほど、殺気立った彼の心の中うちには、気も狂いそうな混乱が、益々烈しくなつて居たのであつた。

その内に往来の人影は、見る見る数を加え出した。と同時に騒さわがしい叫び声も、いつか憎悪を孕はらんで居る険悪な調子を帯び始めた。

「火つけを殺せ。」

「盗^{ぬすびと}人を殺せ。」

「素戔鳴を殺せ。」

二十二

この時部落^{うしろ}の後にある、草山^{くさやま}の楡^{にれ}の木の下には、髯^{ひげ}の長い一人の老人が天心の月を眺めながら、悠々と腰を下していた。物静な春^よの夜は、藪木^{やぶき}の花のかすかな勻^{におい}を柔かく靄^{もや}に包んだまま、こどももただ梟^{ふくろう}の声が、ちようど山その物の吐息^{といき}のように、一天の疎^{まばら}な星の光を時々曇らせているばかりであった。

が、その内に眼の下の部落からは、思いもよらない火事の煙が、風の断たえた中なか空そらへ一すじまっ直すぐに上り始めた。老人はその煙の中に立ち昇る火の粉を眺めても、やはり膝を抱きながら、気楽そうに小声の歌を唱って、一向驚くらしい気色けしきも見せなかつた。しかし間もなく部落からは、まるで蜂はちの巣を壊こわしたような人どよめきの音が聞えて来た。のみならずその音は次第に高くざわめき立って、とうとう戦たたかでも起つたかと思う、烈しい喊かん声せいさえ伝わり出した。これにはさすがの老人も、いささか意外な気がしたと見えて、白い眉まゆをひそめながら、おもむろに腰を擡もたげると、両手を耳へ当てがって、時ならない部落の騒動をじつと聞き澄まそうとするらしかった。

「はてな。劍の音なぞもするようだが。」

老人はこうつぶやながら、しばらくはそこに伸び上つて、絶えず金粉を煽っている火事の煙に見入っていた。

するとほどなく部落から、逃げて来たらしい七八人の男女なんによが、喘あえぎ喘あえぎ草山へ上つて来た。彼等のある者は髪を垂れた、十とおには足りない童児どうじであつた。ある者は肌も見えるくらい、襟えりや裳もすそひ紐もを取り乱した、寝起きらしい娘であつた。そうしてまたある

者は弓よりも猶腰なほの曲つた、立居さえ苦しそうな老婆であつた。

彼等は草山の上まで来ると、云い合せたように皆足を止めて、月夜の空を焦こがしている部落の火事へ眼を返した。が、やがてその中の一人が、楡にれの根がたに佇たたずんだ老人の姿を見るや否や、気づかわ

しそうに寄り添った。この足弱の一群からは、「思おも兼い尊かのねのみこと、
思兼尊。」と云う言葉が、ため息と一しよに溢あふれて来た。と同時に
に胸も露あらわな、夜目にも美しい娘が一人、「伯父様。」と声をか
けながら、こちらを振り向いた老人の方へ、小鳥のように身軽く
走り寄った。

「どうしたのだ、あの騒さわぎは。」

思兼尊はまだ眉まゆをひそめながら、取りすがった娘を片手に抱だいて、
誰にともなくこう尋ねた。

「素す戔さ鳴の尊みがどうした事か、急に乱暴を始めたとか申す事で
ございますよ。」

答えたのはあの快活な娘でなくて、彼等の中に交まじっていた、眼

鼻も見えないような老婆ろうばであつた。

「何、素戔鳴尊が乱暴を始めた？」

「はい、それ故大勢の若者たちが、尊を搦めみことからようと致しますと、

平生へいせい尊の味方をする若者たちが承知致しませんで、とうとうあ

のように何年にもない、大騒動おおそうどうが始まったそうでございますよ

。」

思兼尊は考え深い目つきをして、部落に上つている火事の煙と、尊の胸にすがつてゐる娘の顔とを見比べた。娘は月に照らされたせいか、鬢びんの乱れた頬の色が、透すき徹るかと思うほど青ざめていた。

「火を弄もてあそぶものは、気をつけないと、——素戔鳴尊ばかりではな

い。火を弄ぶものは、気をつけないと——」

尊は皺しわだらけな顔に苦笑を浮べて、今はさらに拵たががつたらしい火の手を遥に眺めながら、黙つて震ふるえている姪めいの髪かみを劬いたわわ撫なでてやつた。

二十三

部落の戦いは翌よくちよう朝あすまで続いた。が、寡かはついに衆の敵ではなかつた。素戔すさのお鳴は味方の若者たちと共に、とうとう敵の手に生い捉けどられた。日頃彼に悪意を抱いていた若者たちは、鞫まりのように彼を縛いめました上、いろいろ乱暴な凌りようじよく辱じよくを加えた。彼は打たれたり

蹴けられたりする度たびごと毎ごとに、ごろごろ地上を転がりまわつて、牛の吼ほえるような怒声を挙げた。

部落ろうにやくの老若おきてはことごとく、律通り彼を殺して、騒動の罪を

贖つくわせようとした。が、思兼おもいかねのみこと尊たぢからおのみことと手力雄尊たぢからおのみことと、この二

人の勢力家だけは、容易に賛同の意を示さなかつた。手力雄尊は

素戔鳴の罪を憎みながらも、彼の非凡りよりよくな膂力りよりよくには愛惜の情を

感じていた。これは同時にまた思兼尊が、むぎむぎ彼ほどの若者

を殺したくない理由でもあつた。のみならず尊みことは彼ばかりでなく、

すべて人間を殺すと云う事に、極端な嫌悪けんおを抱いていた。——

部落の老若は彼の罪を定めさだめるために、三日の間議論を重ねた。

が、二人の尊たちはどうしても意見を改めなかつた。彼等はそこ

で死刑の代りに、彼を追放に処する事にした。しかしこのまま、彼の縄を解いて、彼に広い国外の自由の天地を与えるのは、到底とうて底い彼等の忍び難い、寛大に過ぎた処置であつた。彼等はまず彼の鬚ひげを、一本残らずむしり取つた。それから彼の手足の爪を、まるで貝でも剥はがすように、未練未釈みれんみしゃくなく抜いてしまつた。その上彼の縄を解くと、ほとんど手足も利きかない彼へ、手ん手に石を投げつけたり、慄ひょう悍うかんな狩犬をけしかけたりした。彼は血にまみれながら、ほとんど高たか這たかばいをしないばかりに、蹠そうろう跟とうと部落を逃れて行つた。

彼が高たか天あま原がはらの国をめぐる山々の峰を越えたのは、ちょうどその後ご二日経つた、空模様の怪しい午後であつた。彼は山の頂きへ

来た時、嶮^{けわ}しい岩むらの上へ登つて、住み慣れた部落の横わつて
いる、盆地の方を眺めて見た。が、彼の眼の下には、ただうす白
い霧の海が、それらしい平地をぼんやりと、透^すかして見せるばか
りであつた。彼はしかし岩の上に、朝^{あさ}焼^{やけ}の空を負いながら、長
い間じつと坐つていた。すると谷間から吹き上げる風が、昔の通
り彼の耳へ、聞き慣れた囁^{ささや}きを送つて来た。「素戔嗚よ。お前は
何をさがしているのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来
い。素戔嗚よ。……」

彼はようやく立ち上つた。そうしてまだ知らない国の方へ、お
もむろに山を下^{くだ}り出した。

その内に朝焼の火照^{ほて}りが消えると、ぽつぽつ雨が落ちはじめた。

彼は一枚の衣ころものほかに、何もまとつてはいなかった。頸くび珠だまや劍つるぎは云うまでもなく、生い掬けどりになつた時に奪うばられていた。雨はこの追つい放ほう人にんの上に、おいおい烈はげしくなり始めた。風も横よこなぐりに落おして来ては、時々ずぶ濡ぬれになつた衣の裾はだかを裸はだかの脚あしへたたきつけた。彼は齒はを食くいしじりながら、足もとばかり見みつめて歩あいた。

實際眼じつげんに見えるものは、足もとに重かさなる岩いだけであつた。そのほかは一面に暗くい霧きりが、山や谷を封ふじていた。霧の中では風雨ふううの音ねか、それとも谷川の水の音ねか、凄すさまじくざつと遠おちこち近ちかに煮なえくり返かへる音ねがあつた。が、彼の心の中には、それよりもさらに凄すさまじく、寂さびしい怒いかでかが荒あれ狂くるつていた。

二十四

やがて足もとの岩は、湿った苔こけになった。苔はまた間もなく、深い羊齒しだの茂みになった。それから丈たけの高い熊笹くまざさに、——いつの間にか素戔鳴すさのおは、山の中腹を埋うずめている森林の中へはいつたのであつた。

森林は容易に尽きなかつた。風雨も依然として止まなかつた。空には樅もみや柎とがの枝が、暗い霧を払いながら、悩ましい悲鳴を挙げている。彼は熊笹を押し分けて、遮しや二無二にむにその中を下つて行つた。熊笹は彼の頭を埋めて、絶えず濡れた葉を飛ばせていた。まるで森全体が、彼の行手を遮さえぎるべく、生きて動いているようであつた。

彼は休みなく進み続けた。彼の心の内には相あい不かわ変らず鬱うつ勃ぼつとし
て怒が燃え上つていた。が、それにも関らず、この荒れ模様の森
林には、何か狂暴な喜びを眼ぎませさせる力があるらしかった。彼
は草木やつた蔦かずらを腕一ぱいに搔かきのけながら、時々大きな声を
出して、吼うなつて行く風雨に答えたりした。

ひる午もやや過ぎた頃、彼はとうとう一すじの谷川に、がむしやら
な進路を遮られた。谷川の水のたぎる向うは、削けずつたような絶壁
であつた。彼はその流れに沿つて、再び熊笹を搔かき分けて行つた。
するとしばらくして向うの岸へ、藤ふじ蔓づるを編みんだかけ棧はし橋はしが、水みず
煙むりと雨のしぶきとの中に、危く懸つてゐる所へ出た。

棧橋を隔てた絶壁には、火かし食よくの煙が靡なびいてゐる、大きな洞ほらあ

穴なが幾つか見えた。彼はためらわずに棧橋を渡って、その穴の一つを覗のぞいて見た。穴の中には二人の女が、炉ろの火を前に坐っていた。二人とも火の光を浴びて、描えがいたように赤く見えた。一人は猿のような老婆であったが、一人はまだ年も若いらしかった。それが彼の姿を見ると、同時に声を挙げながら、洞穴の奥へ逃げこもうとした。が、彼は彼等のほかに男手のないのを見るが早いか、猛然と穴の中へ突き進んだ。そうしてまず造作ぞうさもなく、老婆をそこへねじ伏せてしまった。

若い女は壁に懸けた刀子とうすへ手をかけるや否や、素早く彼の胸を刺さそうとした。が、彼は片手を揮ふるつて、一打にその刀子を打ち落した。女はさらに剣つるぎを抜いて、執しゅう念ねく彼を襲襲つて来た。しかし

劍は一瞬の後、やはり鏘然と床に落ちた。彼はその劍を拾い取ると、切先を齒に啣えながら苦もなく二つに折つて見せた。そして冷笑を浮べたまま、戦いを挑むように女を見た。

女はすでに斧を執つて、三度彼に手向おうとしていた。が、彼が劍を折つたのを見ると、すぐに斧を投げ捨てて、彼の憐に訴うべく、床の上にひれ伏してしまつた。

「おれは腹が減っているのだ。食事の仕度をしれい。」

彼は捉えていた手を緩めて、猿のような老婆をも自由にした。それから炉の火の前へ行つて、楽々とあぐらをかいた。二人の女は彼の命令通り、黙々と食事の仕度を始めた。

二十五

洞^{ほら}穴^{あな}の中は広がった。壁にはいろいろな武器が懸けてあつた。それが炉の火の光を浴びて、いずれも美々しく輝いていた。床^{ゆか}にはまた鹿^{しか}や熊^{くま}の皮が、何枚もそこに敷いてあつた。その上何から起るのか、うす甘い^{におい}匂^{におい}が快く暖な空気に漂っていた。

その内に食事の仕度が出来た。野獣の肉、谷川の魚、森^この木の実^み、干^ほした貝、——そう云う物が盤^{さら}や坏^{つきうずたか}に堆^{たか}く盛^もられたまま、彼の前に並べられた。若い女は瓶^{ほたり}を執^とつて、彼に酒^すを勧^{すす}むべく、炉のほとりへ坐りに来た。目^ま近^{じか}に坐っているのを見れば、色の白い、髪^{かみ}の豊かな、愛^{あい}嬌^{きよう}のある女であつた。

彼は獣けもののように、飲んだり食ったりした。盤や坏は見る見る内に、一つ残らず空からになった。女は健けんたん啖な彼を眺めながら子供のようように微笑えいごうしていた。彼に刀子とうすを加えようとした、以前の慄ひょうか悍んな気色けしきなどは、どこを探しても見えなかつた。

「さあ、これで腹は出来た。今度は着る物を一枚くれい。」

彼は食事をすませると、こう云つて、大きな欠あくび伸をした。女は洞ほらあな穴の奥へ行つて、絹の着物を持つて来た。それは今まで彼が見た事のない、精巧な織模様のある着物であつた。彼は身仕度をすませると、壁の上の武器の中から、頭かぶつち椎つるぎの剣をひとふり一振とつて、左の腰に結び下げた。それからまた炉の火の前へ行つて、さつきのようにあぐらを掻かいた。

「何かまだ御用がございますか。」

しばらくの後、女はまた側へ来て、ためらうような尋ね方をした。

「おれは主人の帰るのを待っているのだ。」

「待って、——どうなさるのでございますか。」

「太刀打たちうちをしようと思うのだ。おれは女を劫おびやかして、盗人を働いたなどとは云われたくない。」

女は顔にかかる髪を掻き上げながら、鮮あざやかな微笑を浮べて見せた。

「それでは御待ちになるがものはございませぬ。私がこの洞穴の主人なのでございますから。」

素戔鳴は意外の感に打たれて、思わず眼を大きくした。

「男は一人もいないのか。」

「一人も居りません。」

「この近くの洞穴には？」

「皆私わたくしの妹たちが、二三人ずつ住んで居ります。」

彼は顔をしかめたまま二三度頭を強く振った。火の光、床ゆかの毛皮、それから壁上の太刀たちや劍つるぎ、——すべてが彼には、怪しげな幻のような心もちがした。殊にこの若い女は、きらびやかな頸珠くびだまや劍を飾っているだけに、余計人間離れのした、山やま媛ひめのような気がするのであった。しかし風雨の森林を長い間さまよつた後のちこの危害おそれの惧おそれのない、暖な洞穴に坐っているのは、とにかく快いには違ちがいなかつた。

「妹たちは大勢いるのか。」

「十六人居ります。——ただ今姥が知らせに参りましたから、その内に皆御眼にかかりに、出て参るでございましょう。」

成程なるほどそう云われて見れば、あの猿のような老婆の姿は、いつの間にか見えなくなっていた。

二十六

素戔すさのお鳴は膝を抱えたまま、洞外をどよもす風雨の音にぼんやり耳を傾けていた。すると女は炉の中へ、新に焚き木を加えながら、

「あの——御名前は何とおっしゃいますか。私は大気都おおけつひめ姫と申し

ますが。」と云った。

「おれは素戔嗚だ。」

彼がこう名乗った時、大気都姫は驚いた眼を挙げて、今更のよ
うにこの無様な若者を眺めた。素戔嗚の名は彼女の耳にも、明か
に熟しているようであった。

「では今まではあの山の向うの、高天原たかまがはらの国にいらしたので
ございますか。」

彼は黙って頷うなずいた。

「高天原の国は、好よい所だと申すではございませんか。」

この言葉を聞くと共に、一時静まっていた心頭しんとうの怒火どかが、ま
た彼の眼の中に燃えあがった。

「高天原の国か。高天原の国は、鼠いのししが猪いのししよりも強い所だ。」

大気都姫は微笑した。その拍子ひょうしに美しい齒あざやかが、鮮あざやかに火の光に映つて見えた。

「ここは何と云う所だ？」

彼は強いて冷かに、こう話頭を転換した。が、彼女は微笑を含んで、彼の逞たくましい肩のあたりへじつと眼を注いだまま、何ともその間に答えなかつた。彼は苛いらだ立たしい眉まゆを動かして、もう一度同じ事を繰返した。大気都姫は始めて我に返つたように、滴したたるような媚こびを眼に浮べて、

「ここでございますか。ここは——ここは猪が鼠より強い所でございます。」と答えた。

その時にわか俄に人のけはいがして、あの老婆を先頭に、十五人の若い女たちが、風雨にめげた気色けしきもなく、ぞろぞろ洞穴ほらあなの中へはいつて来た。彼等は皆頼くれないに紅をさして、高々と黒髪を束ねつかていた。それが順々に大気都姫おおけつひめと、親しそうな挨拶あいさつを交換すると、呆気あっけにとられた彼のまわりへ、馴なれ馴なれしく手てん手てに席を占めた。頸く珠びだまの色、耳環みみわの光、それから着物の絹ずれの音、——洞穴の内はそう云う物が、櫓ほたあか明りの中に充ち満ちたせいか、急に狭くなつたような心もちがした。

十六人の女たちは、すぐに彼を取りまいて、こう云う山の中にも似合わない、陽気な酒盛さかもりを開き始めた。彼は始は唾おしのように、ただ勧めすすめられる盃を一息にぐいぐい飲み干していた。が、酔よい

わつて来ると、追いおい大きな声を挙げて、笑つたり話したりする様になつた。女たちのある者は、玉を飾つて琴を弾いた。またある者は、盃を控えて、艶かしい恋の歌を唱つた。洞穴は彼等のえらぐ声に、鳴りどよむばかりであつた。

その内に夜になつた。老婆は炬に焚き木を加えると共に、幾つも油火の燈台をともした。その昼のような光の中に、彼は泥のように酔い痴れながら、前後左右に周旋する女たちの自由になつていた。十六人の女たちは、時々彼を奪い合つて、互に嬌嗔を帯びた声を立てた。が、大抵は大気都姫が、妹たちの怒には頓着なく、酒に中つた彼を壘断していた。彼は風雨も、山々も、あるいはまた高天原の国も忘れて、洞穴を罩めた脂粉の氣の中

に、全く沈^{ちんめん}酒^{しゆ}しているようであつた。ただその大騒^{おほさわ}ぎの最^も中^{なか}にも、あの猿^{さる}のような老婆^{らふだ}だけは、静^{しず}に片隅^{うずくま}に蹲^{うずくま}つて、十六人の女^{おんな}たちの、人目^{ひとめ}を憚^{はばか}らない酔^よ態^{たい}に皮肉^{くわくご}な流^{なが}し目^めを送^{おく}つていた。

二十七

夜^よは次第^{しだい}に更^ふけて行^いつた。空^{から}になつた盤^{さら}や瓶^{ほたり}は、時々^{ときとき}けたたましい音^ねを立てて、床^{ゆか}の上^{うへ}にころげ落^おちた。床^{ゆか}の上^{うへ}に敷^敷いた毛皮^{けいひ}も、絶^絶えず机^{しした}から滴^{したた}る酒^{しゆ}に、いつかぐつしより濡^ぬらされていた。十六人の女^{おんな}たちは、ほとんど正^{しやうたい}体^{たい}もないらしかつた。彼等^{かれら}の口^{くち}から洩^あれるものは、ただ意味^{いみ}のない笑^{わら}い声^{こゑ}か、苦しそうな吐息^{といき}の音^ね

ばかりであった。

やがて老婆は立ち上つて、明るい油火の燈台を一つ一つ消して行つた。後には炉ろに消えかかった、煤臭すすくさい櫓ほたの火だけが残つた。そのかすかな火の光は、十六人の女さいなに虐さいなまれている、小山のような彼の姿を朦朧もうろうといつまでも照していた。……

翌日彼は眼をさますと、洞穴ほらあなの奥にしつらえた、絹や毛皮の寢床の中に、たつた一人横になつていた。寢床には菅すが葺だたみを延べる代りに、堆うずたかく桃かももの花が敷いてあつた。昨日きのうから洞中に溢あふれていた、あのうす甘い、不思議においな匂においは、この桃の花の匂においに違いなかつた。彼は鼻を鳴らしながら、しばらくはただぼんやりと岩の天井を眺めていた。すると氣違いじみた昨夜ゆうべの記憶が、夢のごとく

眼に浮んで来た。と同時にまた妙な腹立たしさが、むらむらと心頭を襲い出した。

「畜生。」

素戔嗚はこう呻きながら、勢いよく寢床を飛び出した。その拍子に桃の花が、煽ったように空へ舞い上った。

洞穴の中には例の老婆が、余念なく朝飯の仕度をしていた。大気都姫はどこへ行ったか、全く姿を見せなかった。彼は手早く靴を穿いて、頭椎の太刀を腰に帯びると、老婆の挨拶には頓着なく、大股に洞外へ歩を運んだ。

微風は彼の頭から、すぐさま宿酔を吹き払った。彼は両腕を胸に組んで、谷川の向うに戦いでいる、さわやかな森林の梢を

眺めた。森林の空には高い山々が、中腹に懸つた靄もやの上に、さんが

んたる肌はだを曝さらしていた。しかもその巨大な山々の峰は、すでに

朝日の光を受けて、まるで彼を見下しながら、声もなく昨夜ゆうべの狂態あざわらを嘲笑わらつているように見えるのであつた。

この山々と森林とを眺めていると、彼は急に洞穴ほらあなの空氣が、

嘔吐おうとを催すほど不快になつた。今は炉ろの火も、瓶ほたりの酒も、乃至ないし寝

床の桃の花も、ことごとく忌いまわしい腐敗にがいの勻いに充満みみしているとし

か思われなかつた。殊ことごとにあの十六人の女たちは、いずれも死穢しえを

隠すために、巧こうな紅粉こうふんを装まっている、屍骨しこつのような心もちさえ

した。彼はそこで山々の前に、思わず深い息をつくくと、悄しやうぜん然ぜん

と頭たまを低たれながら、洞穴の前に懸かつている藤蔓ふじづるの橋を渡わたろうと

した。

が、その時賑かな笑い声が、静な谷間に飴こだましながら、活いき活いきと彼の耳にはいった。彼は我知らず足を止めて、声のする方を振り返った。と、洞穴の前に通かよっている、細い岨路そばみちの向うから、十五人の妹をつれた、昨日きのうよりも美しい大気都姫が、眼早く彼の姿を見つけて、眩まばゆい絹もすの裳ひらを翻ひるしながら、こちらへ急いで来る所であつた。

「素戔嗚尊。素戔嗚尊。」

彼等は小鳥の囀さえずるように、口々に彼を呼びかけた。その声はほとんど宿命的に、折角せつかく橋を渡りかけた素戔嗚の心を蕩とう漾ようさせた。彼は彼自身の腑甲斐ふがいなさに驚きながら、いつか顔中に笑えみを浮

べて、彼等の近づくのを待ちうけていた。

二十八

それ以来素戔鳴^{すさの}は、この春のような洞穴の中に、十六人の女たちと放^{ほう}縦^{じゆう}な生活を送るようになった。

一月ばかりは、瞬く暇に過ぎた。

彼は毎日酒を飲んだり、谷川の魚を釣ったりして暮らした。谷川の上流には瀑^{たき}があつて、そのまた瀑のあたりには年中桃の花が開いていた。十六人の女たちは、朝毎にこの瀑^{たき}壺^{つぼ}へ行つて、桃^と花^{うか}の^かの^に勻^{におい}を^{ひた}を^{ひた}浸^{ひた}した水に肌^{はだ}を洗うのが常であつた。彼はまだ朝日のさ

さない内に、女たちと一しよに水を浴ぶべく、遠い上流まで熊笹の中を、分け上るのぼ事も稀まれではなかつた。

その内に偉大な山々も、谷川を隔てた森林も、おいおい彼と交渉のない、死んだ自然に変わつて行つた。彼は朝夕静寂な谷間の空気を呼吸しても、寸毫すんごうの感動さえ受けなくなつた。のみならずそう云う心の変化が、全然彼には気にならなかつた。だから彼は安んじて、酒びたりな日毎を迎えながら、幻のような幸福を楽んでいた。

しかしある夜夢の中に、彼は山上の岩むらに立つて、再び高たかま天原あめの国を眺めやつた。高天原の国には日が当つて、天の安やすか河わの大きな水が焼太刀やきだちのごとく光つていた。彼は勁い風つよに吹か

れながら、眼の下の景色を見つめていると、急に云いようのない寂しさが、胸一ぱいに漲みなぎつて来た、そうして思わず、声を立てて泣いた。その声にふと眼がさめた時、涙は實際彼の煩ほおに、冷たい痕あとを止めていた。彼はそれから身を起して、かすかな櫓ほたあか明りに照らされた、洞ほらあな穴の中を見廻した。彼と同じ桃花とうかの寢床には、酒の匀においのする大氣都姫おおけつひめが、安らかな寢息を立てていた。これは勿論彼にとって、珍しい事でも何でもなかった。が、その姿に眼をやると、彼女の顔は不思議にも、眉目びもくの形こそ変らないが、垂死すいしの老婆と同じ事であつた。

彼は恐怖と嫌悪けんおとに、わななく齒を噛みしめながら、そつと生なまあたあたたかか暖あい寢床すべをすびり脱けた。そうして素早く身仕度みじたくをすると、あ

の猿のような老婆も感づかないほど、こっそり洞穴の外へ忍んで出た。

外には暗い夜の底に、谷川の音ばかりが聞えていた。彼は藤ふじづ蔓るの橋を渡るが早いか、獣けもののように熊笹くぐを潜くぐつて、木の葉一つ動かない森林を、奥へ奥へと分けて行つた。星の光、冷かな露あふ、苔こけの勻ふくろう、梟ふくろうの眼——すべてが彼には今までにない、爽かな力に溢あふれているようであつた。

彼は後あとも振返らずに、夜が明けるまで歩み続けた。森林の夜明けは美しかった。暗い柵とがや樅もみの空が燃えるように赤く染まつた時、彼は何度も声を挙げて、あの洞穴を逃れ出した彼自身の幸福を祝したりした。

やがて太陽が、森の真上へ来た。彼は梢の山鳩を眺めながら、弓矢を忘れて来た事を後悔した。が、空腹を充すべき木の実は、どこにでも沢山あった。

日の暮は瞼しい崖の上に、寂しそうな彼を見出した。森はその崖の下にも、針葉樹の鋒を並べていた。彼は岩かどに腰を下して、谷に沈む日輪を眺めながら、うす暗い洞穴の壁に懸っている、剣や斧を思いやった。すると何故か、山々の向うから、十六人の女の笑い声が、かすかに伝わって来るような心もちがした。それは想像も出来ないくらい、怪しい誘惑に富んだ幻であった。彼は暮れかかる岩と森とを、食い入るように見据えたまま、必死にその誘惑を禦ごうとした。が、あの洞穴の榾火の思い出は、まるで眼

に見えない網のように、じりじり彼の心を捉とらえて行つた。

二十九

素す淺さ鳴のは一日のちの後、またあの洞中に歸つて來た。十六人の女たちは、皆彼の逃げた事も知らないような顔をしていた。それはどう考えても、無関心よそおを装つていゝとは思われなかつた。むしろ彼等は始めから、ある不思議な無感受性を持つてゐるような気がするのであつた。

この彼等の無感受性は、当座の間彼を苦しませた。が、さらに一月ばかり経つて見ると、反かえつて彼はそのため、前よりも猶な安おや

すやす
々々、いつまでも醒め^さない酔^よのような、怪しい幸福^{ひた}に浸^{ひた}る事が出来た。

一年ばかりの月日は、再び夢のように通り過ぎた。

するとある日女たちは、どこから洞^{ほら}穴^{あな}へつれて来たか、一頭
の犬を飼うようになった。犬は全身まっ黒な、犢^こほどもある牡^{おす}であつた。彼等は、殊^おに大^お気^お都^け姫^{ひめ}は、人間の^{けもの}ようにこの犬を可愛が
つた。彼も始は彼等と一しよに、盤^{さら}の魚^{けもの}や獣^{けもの}の肉を投げてやる事
を嫌^たわ^わなかつた。あるいはまた酒後の戯^たれ^わに、相^す撲^もをとる事も度
々あつた。犬は時々前足を飛ばせて、酔^よい痴^しれた彼を投げ倒した。
彼等はその度に手を叩いて、賑かに笑い興^いじ^くしながら、意^い気^く地^じのな
い彼を嘲^{あざわ}り合^あつた。

ところが犬は一日毎に、益々彼等に愛されて行つた。大氣都姫はとうとう食事の度に、彼と同じ盤さらや瓶ほたりを、犬の前にも並べるようになった。彼は苦にがい顔をして、一度は犬を逐おい払おうとした。が、彼女はいつになく、美しい眼の色を変えて、彼の我儘とがを咎とがめ立てた。その怒を犯してまでも、犬を成せい敗ばいしようとする勇氣は、すでに彼には失われていた。彼はそこで犬と共に、肉を食つたり酒を飲んだりした。犬は彼の不快を知っているように、いつも盤さらを舐なめ廻しながら、彼の方へ牙きばを剥むいて見せた。

しかしその間は、まだ好かつた。ある朝彼は女たちに遅れて、例の通り瀑たきを浴びに行つた。季節は夏に近かつたが、そのあたりの桃は相あい不かわ変らず、谷間の霧の中に開いていた。彼は熊くま笹ざさを押し

分けながら、桃の落花を漉たえている、すぐ下の瀑壺たきつぼへ下りよう

とした。その時彼の眼は思いがけなく、水を浴びている××××

××黒い獣けものが動いているのを見た。××××××××××××××××

××××××××××××××××。彼はすぐに腰の劍つるぎを抜い

て、一刺しに犬を刺そうとした。が、女たちはいずれも犬をかば

つて、自由に劍を揮ふるわせなかつた。その暇に犬は水を垂らしなが

ら、瀑壺たきつぼの外へ躍り上つて、洞穴の方へ逃げて行つてしまつた。

それ以来夜毎の酒盛りにも、十六人の女たちが、一生懸命に奪

い合うのは、素戔鳴ではなくて、黒犬であつた。彼は酒に中ひたりな

がら、洞穴の奥うづくまに蹲ひとよじゆうよいつて、一夜中酔泣きの涙を落していた。彼

の心は犬に対する、燃えるような嫉妬しつとで一ぱいであつた。が、そ

の嫉妬の浅間あさましきなどは、寸毫すんごうも念頭ねんとうには上のほらなかつた。

ある夜彼がまた洞穴の奥に、泣き顔を両手へ埋うづめていると、突然誰かが忍びよつて、両手に彼を抱いだきながら艶なまめかしい言葉を囁ささやいた。彼は意外な眼を挙げて、油あぶら火らびには遠い薄暗うすくがり、じつと相手の顔を透すかして見た。と同時に怒声を発して、いきなり相手を突き放した。相手は一たまりもなく床ゆかに倒れて、苦しそうな呻しんぎん吟ぎんの声を洩もらした。——それはあの腰こしも碌ろくに立たない、猿のような老婆の声であつた。

老婆を投げ倒した素戔鳴は、涙に濡れた顔をしかめたまま、虎のように身を起した。彼の心はその瞬間、嫉妬と憤怒と屈辱との煮え返っている坩堝であつた。彼は眼前に犬と戯れている、十六人の女たちを見るが早いか、頭椎の太刀を引き抜きながら、この女たちの群つた中へ、我を忘れて突進した。

犬は咄嗟に身を翻して、危く彼の太刀を避けた。と同時に女たちは、哮り立つた彼を引き止むべく、右からも左からもからみついた。が、彼はその腕を振り離して、切先下りにもう一度狂いまわる犬を刺そうとした。

しかし大刀は犬の代りに、彼の武器を奪おうとした、大気都姫の胸を刺した。彼女は苦痛の声を洩らして、のけざまに床の上へ

倒れた。それを見た女たちは、皆悲鳴を挙げながら、じゅうぜん 粦然と四方へ逃げのいた。燈台の倒れる音、けたたましく犬の吠える声、それから盤さらだの瓶ほたりだのが粉微塵こなみじんに砕ける音、——今まで笑い声に満ちていた洞穴ほらあなの中も、一しきりはまるで嵐のような、混乱の底に投げこまれてしまった。

彼は彼自身の眼を疑うように、一刹那いつせつなは茫然たたずと佇んでいた。が、たちまち大刀を捨てて、両手に頭を抑えたとと思うと、息苦しうな呻うめき声を発して、弦いとを離れた矢よりも早く、洞穴の外へ走り出した。

空には暈かきのかかった月が、無気味ぶきみなくらいぼんやり蒼あおざめていた。森の木々もその空に、暗枝あんしをさし交かわせて、ひっそり谷を封じ

たまま、何か凶事きようじが起るのを待ち構えているようであつた。が、彼は何も見ず、何も聞かずに走り続けた。熊笹は露を振りながら、あたかも彼を埋めようとするごとく、どこまで行つても浪なみを立てていた。時々夜鳥よどりがその中から、翼に薄い燐光りんこうを帯びて、風もない梢こずえへ昇つて行つた。……

明け方あ彼は彼自身を、大きな湖の岸に見出した。湖は曇つた空の下にちようど鉛なまりの板かと思うほど、波一つ揚げていなかつた。周囲そびに聳えた山々も重苦しい夏の緑の色が、わずかに人心地のついた彼には、ほとんど永久に癒いやす事を知らない、憂鬱そのもののごとくに見えた。彼は岸の熊笹を分けて、乾いた砂の上に下りた。それからそこに腰おろを下して、寂みしい水面へ眼を送つた。湖に

は遠く一二点、かいつぶりの姿が浮んでいた。

すると彼の心には、急に悲しさがこみ上げて来た。彼は高天たかまが

原はらの国にいた時、無数の若者を敵にしていた。それが今では、

一匹の犬が、彼の死敵してぎのすべてであつた。——彼は両手に顔を埋うづめて、長い間大声に泣いていた。

その間に空模様が変つた。対岸を塞ふさいだ山の空には、二三度鍵かぎの手の稲妻いなずまが飛んだ。続いて殷々いんいんと雷いかずちが鳴つた。彼はそれでも泣きながら、じつと砂の上に坐つていた。やがて雨を孕はらんだ風が、大うねりに岸の熊笹を渡つた。と、俄にわかに湖が暗くなつて、ざわざわ波が騒ぎ始めた。

雷いかずちが猶鳴り続けた。その内に対岸の山が煙り出すと、どことも

なくぎつと木々が鳴つて、一旦暗くなつた湖が、見る見る向うからまた白くなつた。彼は始めて顔を挙げた。その途端とたんに天を傾けて、瀑たきのような大雨おおあめが、沛然はいぜんと彼を襲つて来た。

三十一

対岸の山はすでに見えなくなつた。湖も立ち罩こめた雲煙うんえんの中に、ややともすると紛まぎれそうであつた。ただ、稲妻ひらめの閃ひらめく度に、波なみの逆立さかだつた水面が、一瞬間遠くまで見渡された。と思うと雷いかずちの音が、必ず空を搔かきむしるように、続けさまに轟ごうごう々と爆発した。素戔すさの鳴おはず濡ぬれになりながら、未いまだに汀なぎさの砂を去らなかつた。

彼の心は頭上の空より、さらに晦濛かいもうの底へ沈んでいた。そこには穢けがれ果てた自己に對する、憤懣ふんまんよりほかに何もなかつた。しかし今はその憤懣ほしいまもを恣ほしいまもに洩らす力さえ、——大樹の幹に頭を打ちつけるか、湖の底に身を投ずるか、一気に自己を亡すべき、最後の力さえ涸かれ尽きていた。だから彼は心身とも、まるで破れた船のように、空しく騒さわぎ立つ波に臨んだまま、まつ白に落す豪雨を浴びて、默然もくねんと坐っているよりほかはなかつた。

天はいよいよ暗くなつた。風雨も一層力を加えた。そうして——突然彼の眼の前が、ぎらぎらと凄まじい薄紫うすむらさきになつた。山が、雲が、湖が皆半空はんくうに浮んで見えた。同時に地軸ちじくも砕けたよ
うな、落雷の音が耳を裂さいた。彼は思わず飛び立とうとした。が、

すぐにまた前へ倒れた。雨は俯伏せになつた彼の上へ未練未釈なく降り濺いだ。しかし彼は砂の中に半ば顔を埋めたまま、身動きをする気色も見えなかつた。……

何時間か過ぎた後、失神した彼はおもむろに、砂の上から起き上つた。彼の前には静な湖が、油のように開いていた。空にはまだ雲が立ち迷つてただ一幅の日の光が、ちようど対岸の山の頂へ帯のように長く落ちていた。そうしてその光のさした所が、そこだけほかより鮮かな黄ばんだ緑に仄めいていた。

彼は茫然と眼を挙げて、この平和な自然を眺めた。空も、木々も、雨後の空気も、すべてが彼には、昔見た夢の中の景色のような、懐しい寂莫に溢れていた。

「何かおれの忘れていた物が、あの山々の間に潜んでいる。」——
彼はそう思いながら、貪るむさぼように湖を眺め続けた。しかしそれが何だったかは、遠い記憶を辿たどつて見ても、容易に彼には思い出せなかった。

その内に雲の影が移つて、彼を囲む真夏の山々へ、一時に日の光が照り渡つた。山々を埋めるうみ森の緑は、それと共に美しく湖の空に燃え上つた。この時彼の心には異様な戦せん慄りつが伝わるのを感じた。彼は息を呑みながら、熱心に耳を傾けた。すると重なり合つた山々の奥から、今まで忘れていた自然の言葉が声のない雷いかずちのように轟とどろいて来た。

彼は喜びに戦おのいた。戦きながらその言葉の威力の前に圧倒され

た。彼はしまいには砂に伏して、必死に耳を塞ふさごうとした。が、自然は語り続けた。彼は嫌でもその言葉に、じつと聞き入るより途みちはなかつた。

湖は日に輝きながら、澆はつらつ澆なぎぎとその言葉に応じた。彼は——その汀なぎぎにひれ伏している、小さな一人の人間は、代る代る泣いたり笑ったりしていた。が、山々の中から湧き上る声は、彼の悲喜には頓着なく、あたかも目に見えない波濤のように、絶えまなく彼の上へ漲みなぎつて来た。

素戔嗚すさのおはその湖の水を浴びて、全身の穢けがれを洗い落した。それから岸に臨んで、大きな樅もみの木の陰へ行つて、久しぶりに健すこやな眠に沈んだ。が、夢はその間も、深い真夏の空の奥から、鳥の羽根が一すじ落ちるように、静に彼の上へ舞さがい下つて来た。――

夢の中は薄暗かつた。そうして大きな枯木が一本、彼の前に枝のぼを伸のびていた。

そこへ一人の大男が、どこからともなく歩いて来た。顔ははっきり見えなかつたが、柄つかりに竜の飾のある高麗こまつるぎ剣を佩はいている事は、その竜の首が朦朧もうろうと金色こんじきに光っているせいか、一目にもすぐに見分けられた。

大男は腰の剣つるぎを抜くと、無造作むぞうさにそれを鐔つばもと元まで、大木の根

本へ突き通した。

素戔鳴はその非凡な臂りよりよく力りよりよくに、驚嘆しずにはいられなかつた。

すると誰か彼の耳に、

「あれはほのいかずちのみこと火 雷 命 だ。」と、囁あいずいてくれるものがあつた。

大男は静に手を挙げて、彼に何か相図あいずをした。それが彼には何となく、その高麗劍こまつるぎを抜けと云う相図のように感じられた。そうして急に夢が覚めた。

彼は茫然と身を起した。微風に動いている樅もみこずえの梢こずえには、すでに星が撒まかれていた。周囲にも薄白い湖のほかは、熊笹そよの戦こけぎや苔こけの勻においが、かすかに動いている夕闇があつた。彼は今見た夢を思い出しながら、そう云うあたりへ何気なにげなく、懶ものうい視線しせんを漂ただよわせた。

と、十歩と離れていない所に、夢の中のそれと変りのない、一本の枯木のあるのが見えた。彼は考える暇いとまもなく、その枯木の側へ足を運んだ。

枯木はさつきの落雷に、裂さかれたものに違いなかった。だから根元には何かの針葉しんようが、枝ごと一面に散らばっていた。彼はその針葉を踏むと同時に、夢が夢でなかった事を知った。——枯木の根本には一ひとつり振こまつるぎの高麗剣が竜の飾のある柄つかを上つかにほとんど鏢つばも見えないほど、深く突き立っていたのであった。

彼は両手に柄つかを掴つかんで、渾身こんしんの力をこめながら、一気にその剣つるぎを引き抜いた。剣は今し方磨といだように鏢つばもと元もとから切きつさき先さきまで冷やかな光を放っていた。「神々はおれを守って居て下さる。」

——そう思うと彼の心には、新しい勇氣が湧くような気がした。彼は枯木の下に跪ひざまずいて天上の神々に祈りを捧げた。

その後彼はまた樅もみの木陰こかげへ歸つて、しつかり劍を抱いだきながら、もう一度深い眠に落ちた。そうして三日三晩の間、死んだように眠り続けた。

眠から覚めた素戔鳴は再び体を清むべく、湖の汀なぎさへ下りて行つた。風の風なぎ尽した湖は、小波さざなみさえ砂を揺ゆすらなかつた。その水が彼の足もとへ、汀に立つた彼の顔を、鏡のごとく鮮かに映して見せた。それは高天原たかまがはらの国にいた時の通り、心も体も逞たくましい、醜みにくい神のような顔であつた。が、彼の眼の下には、今までにない一筋の皺しわが、いつの間にか一年間の悲しみの痕あとを刻んでいた。

三十三

それ以来彼はたった一人、ある時は海を渡り、ある時はまた山を越えて、いろいろな国をさまよつて歩いた。しかしどの国のどの部落も、未嘗て彼の足を止めさせるには足らなかつた。それらは皆名こそ変つていたが、そこに住んでいる民の心は、高天原の国と同じ事であつた。彼は——高天原の国に未練のなかつた彼は、それらの民に一臂いちびの労を借してやった事はあつても、それらの民の一人となつて、老いよふと思つた事は一度もなかつた。「素戔すさ鳴なよ。お前は何を探しているのだ。おれと一しよに来い。おれと

一しよに來い。……」

彼は風が囁くままに、あの湖を後にしてから、ちようど満七年の間、はてしない漂泊を続けて來た。そうしてその七年目の夏、彼は出雲の簸の川を遡つて行く、一艘の独木舟の帆の下に、蘆の深い兩岸を眺めている、退屈な彼自身を見出したのであつた。

蘆の向うには一面に、高い松の木が茂つていた。この松の枝が、むらむらと、互に鬩ぎ合つた上には、夏霞に煙っている、陰鬱な山々の頂があつた。そうしてそのまた山々の空には、時々鷺が両三羽、眩く翼を閃かせながら、斜に渡つて行く影が見えた。が、この鷺の影を除いては、川筋一帯どこを見ても、ほとんど人

を脅すおびやかような、明い寂寞が支配していた。

彼は舷ふなばたに身を凭もたせて、日に蒸むされた松脂まつやにの勻においを胸一ぱいに吸

いこみながら、長い間独まるきぶね木舟を風の吹きやるのに任せていた。

實際この寂しい川筋の景色も、幾多の冒険に慣なれた素戔嗚には、

まるで高天原たかまがはらの八衢やちまたのように、今では寸分すんぶんの刺戟しげきさえない、

平凡な往来に過ぎないのであつた。

夕暮が近くなつた時、川幅が狭くなると共に、兩岸には蘆あしが稀まれ

になつて、節ふしくれ立つた松の根ばかりが、水と泥との交まじる所を、

荒涼と絡かかつているようになった。彼は今夜の泊りを考えながら、

前よりはやや注意深く、兩岸に眼を配くばつて行つた。松は水の上ま

で枝垂しだれた枝を、鉄網のように纏からめ合せて、林の奥の神秘的な世界

を、執念しゅうねく人目ひとめから隠ひそしていた。それでも時たまその松が、鹿しかでも水を飲みに来るせいまばらか、疎すに透すいている所には不気味なほど赤い大茸おおたけが、薄暗い中に簇そうそう々と群むらっている朽木も見えた。

益々夕暮が迫せまつて来た。その時、彼は遥か向うの、水に臨んで
いる一枚岩の上に、人間らしい姿が一つ、坐まっているのを発見みした。勿論この川筋には、さつきから全然人煙じんえんの挙あっている容よう子すは見えなかった。だからこの姿を発見した時も、彼は始は眼を疑うつて、高麗劍こまつるぎの柄つかにこそ手をかけて見たが、まだ体は悠々と独
木舟の舷へらに凭たせていた。

その内に舟は水脈みおを引いて、次第にそこへ近づいて来た。すると一枚岩の上うへにいるのも、いよいよ人間まに紛まれなくなった。のみ

ならずほどなくその姿は、白衣びやくいの裾を長く引いた、女だと云う事まで明らかになつた。彼は好奇心に眼を輝かせながら、思わず独木舟みよしの舳しほに立ち上つた。舟はその間も帆ほに微風を孕はらんで、小暗おくらく空に蔓はびこつた松の下を、刻々一枚岩の方へ近づきつつあつた。

三十四

舟はどうとう一枚岩の前へ来た。岩の上には松の枝が、やはり長々と枝垂しだれていた。素戔すさの鳴は素早く帆を下すと、その松の枝を片手に掴つかんで、両足へうんと力を入れた。と同時に舟は大きく揺れながら、舳しほに岩角いわかどの苔こけをかすつて、たちまちそこへ横づけに

なつた。

女は彼の近づくのも知らず、岩の上へ独り泣き伏していた。が、人のけはいに驚いたのか、この時ふと顔を擡^{もた}げて、舟の中の彼を見たと思うと、やにわに悲鳴を挙げながら、半ば岩を抱^{いだ}いている、太い松の蔭に隠れようとした。しかし彼はその途端^{とたん}に、片手に岩角を掴^{つか}んだまま、「御待ちなさい。」と云うより早く、後^{うしろ}へ引き残した女の裳^{もすそ}を、片手にしつかり握りとめた。女は思わずそこへ倒れて、もう一度短い悲鳴を漏^もらした。が、それぎり身を起す気^け色^{しき}もなく、また前のように泣き入ってしまった。

彼は纜^{ともづな}を松の枝に結ぶと、身軽く岩の上へ飛び上った。そうして女の肩へ手をかけながら、

「御安心なさい。私は何もあなたの体に、害を加えようと云うの
じやありません。ただ、あなたがこんな所に、泣いているのが不
審しんでしたから、どうしたのかと思つて、舟を止めたのです。」と
云つた。

女はやつと顔を挙げて、水の上を罩こめた暮色の中に、怯おず怯おず
彼の姿を見上げた。彼はその刹那にこの女が、夢の中にのみ見る
事が出来る、例えばこの夏の夕明ゆうあかりのような、どこことなくもの
悲しい美しさに溢あふれている事を知つたのであつた。

「どうしたのです。あなたは路でも迷つたのですか。それとも悪
者にでも浚さらわれたのですか。」

女は黙つて、首を振つた。その拍子ひょうしに頸珠くびだまの琅玕ろうかんが、か

すかに触れ合う音を立てた。彼はこの子供のような、否いやと云う返事の身ぶりを見ると、我知らず微笑が唇のぼに上つて来ずにはいられなかつた。が、女はその次の瞬間には、見る見る恥しそうな色に頬を染めて、また涙うるに沾うるんだ眼を、もう一度膝ひざへ落してしまつた。「では、——ではどうしたのです。何か難儀な事でもあつたら、遠慮なく話して御覧なさい。私に出来る事でさえあれば、どんな事でもして上げます。」

彼がこう優しく慰めると、女は始めて勇氣を得たように、時々まだ口ごもりながら、とにかく一切の事情を話して聞かせた。それによると女の父は、この川かわ上かみの部落おさの長おさをしている、足名あしなつ椎ちと云うものであつた。ところが近頃部落なんによの男女が、続々と疫えき

病びようにたお休れるため、足名稚は早速みこ巫女に命じて、神々の心を尋ねさせた。すると意外にも、ここにくしなだひめいる、櫛名田姫と云う一人娘を、高志こしの大蛇おろちいけにえの犠えにしなければ、部落全体がひとつき一月の内に、死に絶えるであろうと云う託宣たくせん宣せんがあつた。そこで足名稚は已やむを得ず、部落の若者たちと共に舟をぎ舩して、遠い部落からこの岩の上まで、櫛名田姫を運んで来た後、彼女一人を後に残して、歸つて行つたと云う事であつた。

三十五

くしなだひめ櫛名田姫の話くしなだひめを聞き終ると、素戔すさの鳴おはう項なをそ反そらせながら、愉快

そうに黄昏たそがれの川を見廻した。

「その高志こしの大蛇おろちと云うのは、一体どんな怪物なのです。」
「人の噂うわさを聞きますと、頭かしらと尾とが八つある、八つの谷にも亘わたるるくらい、大きな蛇くちなわだとか申す事でございます。」

「そうですか。それは好よい事を聞きました。そんな怪物には何年にも、出合った事がありませんから、話を聞いたばかりでも、力ちからからこぼ瘰うぶの動くような気がします。」

櫛名田姫は心配そうに、そつと涼しい眼を挙げて、無頓着な彼を見守った。

「こう申す内にもいつ何時なんどき、大蛇が参るかわかりませんが、あなたは——」

「大蛇を退治する心算です。」

彼はきつぱりこう答えると、両腕を胸に組んだまま、静に一枚岩の上を歩き出した。

「退治すると仰有つても、大蛇は只今申し上げた通り、一方
ならない神でございますから——」

「そうです。」

「万一あなたがそのために、御怪我をなさらないとも限りませ
し、——」

「そうです。」

「どうせ私は犠になるものと、覚悟をきめた体でございます。た
といこのまま、——」

「御待ちなさい。」

彼は歩みを続けながら、何か眼に見えない物を払いのけるような手真似をした。

「私はあなたをおめおめと大蛇の犧いけにえにはしたくないのです。」

「それでも大蛇が強ければ——」

「仕方がないと云うのですか。たとい仕方がないにしても、私はやはり戦うのです。」

櫛くしなだひめ名田姫はまた顔を赤めて、帯に下げた鏡をまさぐりながら、かすかに彼の言葉を押し返した。

「私が大蛇の犧いけにえになるのは、神々の思おぼしめ召しでございます。」

「そうかも知れませんが。しかし犧いけにえになると云う事がなかったら、

あなたは今時分たった一人、こんな所に来てはいないでしょう。して見ると神々の思召しは、あなたを大蛇の犠いけにえにするより、反かえつて私に大蛇の命を断たせようと云うのかも知れません。」

彼は櫛名田姫の前に足を止めた。と同時に一瞬間、嚴おごそかな権威の閃ひらめきが彼の醜みにくい眉目の間に磅ぼうはくしたように思われた。

「けれども巫女みこが申しますには——」

櫛名田姫の声はほとんど聞えなかつた。

「巫女は神々の言葉を伝えるものです。神々の謎を解くものではありません。」

この時突然二頭の鹿が、もう暗くなつた向うの松の下から、わずかに薄うすじら白うすしらんだ川の中へ、水みづ煙けむりを立てて跳おどりこんだ。そう

して角を並べたまま、必死にこちらへ泳ぎ出した。

「あの鹿の慌あわてようは——もしや来るのではございますまいか。あれが、——あの恐ろしい神が、——」

櫛名田姫はまるで狂気のように、素戔鳴の腰へ縋すがりついた。

「そうです。とうとう来たようです。神々の謎の解ける時が。」

彼は対岸に眼を配くばりながら、おもむろに高麗劍こまつるぎの柄つかへ手をか

けた。するとその言葉がまだ終わらない内に、驟しゅう雨の襲ういかかる

ような音が、対岸の松林を震わせながら、その上に疎まぼらな星を撒まい

た、山々の空へ上のぼり出した。

(大正九年五月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「大阪毎日新聞 夕刊」

1920（大正9）年3月～6月

入力：j.utiya

校正：湯地光弘

1999年8月27日公開

2012年3月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

素戔鳴尊

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>